

M

I

N

A

M



C

R

E

C

U

L

T

U

R

E



E

C

N

E

O

T

O

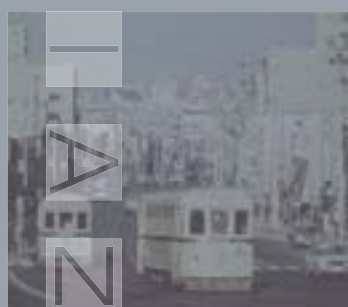
A

Z

A

B

U



P

P

O

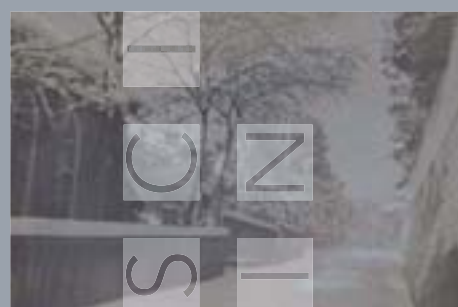


H

O

T

O



I

C

S

N

I

A

A

Z

A

B

U

D

A

I

S

B

G



S

T

O

R

Y

H

I

麻

布

未

来

写

真

館

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会
活動の記録(平成21年度～平成26年度)

A

Z

A

Z

A

B

U

J

U

B

A

N



B

U



港区麻布地区総合支所

港区平和都市宣言

かけがえのない美しい地球を守り、世界の恒久平和を願う人びとの心は一つであり、いつまでも変わることはありません。

私たちも真の平和を望みながら、文化や伝統を守り、生きがいに満ちたまちづくりに努めています。

このふれあいのある郷土、美しい大地をこれから生まれ育つ子どもたちに伝えることは私たちの務めです。

私たちは、我が国が『非核三原則』を堅持することを求めるとともに、ここに広く核兵器の廃絶を訴え、心から平和の願いをこめて港区が平和都市であることを宣言します。

昭和60年8月15日

港 区

はじめに

麻布未来写真館とは

平成 21 年度から港区麻布地区総合支所では、区民や大学等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取組として「麻布未来写真館」を開始しました。

麻布地区の写真という資料を保存・収集していくことにより、麻布地区に暮らす人々にとって身近な歴史・文化資源を保全・継承し、将来に向けて活用していくことを目的としています。

同時に、「まち」の歴史や文化をより多くの皆様に知っていただき、麻布地区への愛着を深めていただく一助となることを目指しています。

「ファインダーをとおして、未来に向けた新しい麻布を発信していきます。」

写真には写された記録だけではなく、多くの人々にとっての体験の「記憶」をも含められた、かけがえのない価値が備わっています。

本活動報告に掲載された写真は、新しいものも古いものも全て、ファインダーをとおして「麻布」をめぐる様々な人々の記憶を未来につなぐ貴重な記録です。

麻布の未来に向け、麻布地区総合支所は、多くの方々に記録と記憶の価値を伝え、区民の皆様の地域への共感や愛着をより一層高めてもらえるよう取り組んでまいります。

活動を進めるにあたり、様々なかたちでご尽力をいただきました区民の皆さんや関係者の方々に、心から御礼を申し上げます。

平成 27 年 3 月 港区麻布地区総合支所協働推進課

《 目 次 》

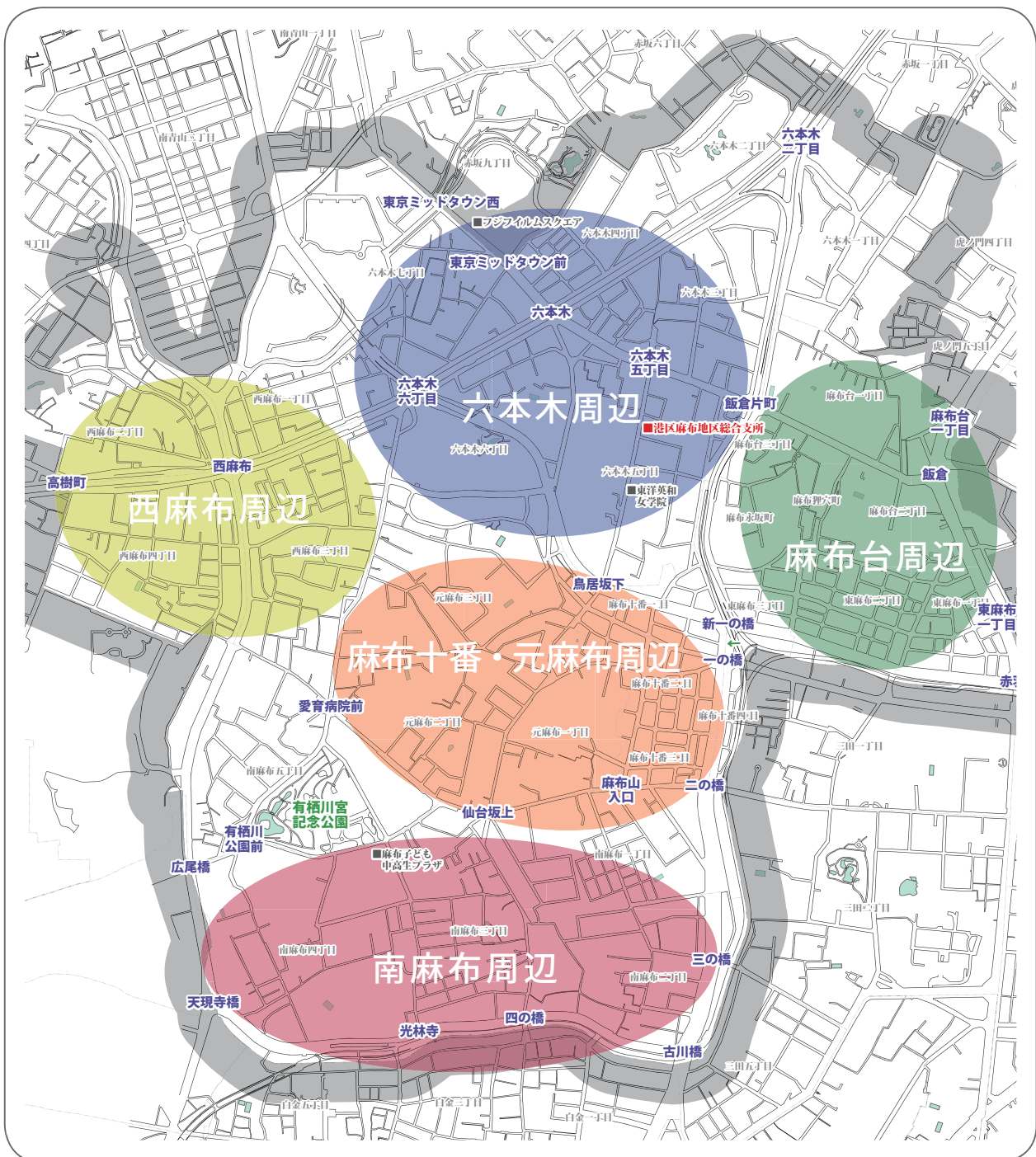
はじめに	01
I . 分科会メンバー作成パネルの紹介	02
パネル目次	03
II . 分科会活動の概要	105
III . パネル展の開催	106
IV . 携わった方々の声	112
V . 参 考 資 料	114

この冊子は、平成 21 年度から平成 26 年度までの 6 年間の活動で作成したパネルをまとめたものです。

I. 分科会メンバー作成パネルの紹介

パネルの作成にあたっては、「麻布未来写真館」事業で麻布のまちの変化を保存する取組として行っている「まち歩き（撮影）」での写真やパネル作成のために個別撮影した写真、また区民等から提供していただいた写真や資料を活用しました。

なお、「I. 分科会メンバー作成パネルの紹介」には、分科会活動で、関係機関などの協力のもと、写真・文献等の資料により、分科会メンバーが独自に調査し、作成したパネルの内容を掲載しています。



パネル目次

六本木周辺	04
麻布台周辺	35
西麻布周辺	46
麻布十番・元麻布周辺	57
南麻布周辺	66
古い写真	73
歴史や文化	78
科学と自然	92
その他	98

<写真について>

作成した多くのパネルで新旧の比較を行っているが、必ずしも同一視点からの撮影にはなっていない。また、変化の様子をとらえるためにあえて周辺のまち並みも写してイメージの伝わる構図とした。

なお、写真に写っている個人や所有（車等）の特定を避けるため、さらに撮影条件、画像の経年劣化等を補うために軽微な画像加工を一部加えている。



昭和初期

出典：昭和御大礼奉祝志

大衆化してきた活動写真も、六本木映画館の開業とともに、この付近の人々に新しい娯楽を与えてくれた。



平成 21 年

映画館は、今では銀行と携帯電話の販売店。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和初期 ◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：昭和御大礼奉祝志)

写真下：平成 21 年(2009 年)

芋洗坂（六本木5、6丁目）



昭和 38 年

出典：みなと写真散歩

芋間屋があったためにこの名が付いた。朝日神社の先を麻布警察署の裏へ上がる道を言う。六本木交差点への道は明治時代中期以降に出来たものである。



平成 21 年

昔も今も郵便ポストの位置は変わっていない。電線のない電柱が見られるのは今だけ。近々には抜柱され電線地中化及び道路整備工事も完了する。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 38 年(1963 年)

◇写真提供：港区立港郷土資料館（出典：みなと写真散歩）

写真下：平成 21 年(2009 年)

六本木周辺

龍土軒（六本木7丁目）



昭和 29 年

龍土軒は、明治 33 年（1900 年）に麻布新竜土町に開業した、当時としてはまだ珍しかったフランス料理店。田山花袋、蒲原有明、国木田独歩らがここを利用し龍土会と称した。

もともと画家、美術史家たちが常連であったが、麻布軍人町のだ真ん中だったため、将校、将官等の利用が多く、昭和 11 年の 2.26 事件のころに青年将校たちの会合に用いられた事で有名。



昭和 39 年

出典：みなと写真散歩

明治時代からの藝術と国家変遷の生きた歴史であったが、現在は西麻布に移転し、跡地には別の新たなビルが建築中。



平成 21 年

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 29 年（1954 年）

◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真中：昭和 39 年（1964 年）

◇写真提供：港区立港郷土資料館（出典：みなと写真散歩）

写真下：平成 21 年（2009 年）

飯倉片町（六本木5丁目）



昭和 16 年

出典：麻布区史

武者窓造り（縦に太い格子の入った窓）のお屋敷が残っていた。



平成 21 年

ビルが並び路面には中華料理店やカフェが軒を連ねる。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 16 年(1941 年)

◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：麻布区史)

写真下：平成 21 年(2009 年)

昭和6年

鳥居坂は、江戸時代から大名屋敷のあったところで、その静かな雰囲気は現在も受け継がれている。



出典：麻布鳥居坂警察署誌



平成21年

今はインターナショナル、ハイテク、エコ、バリアフリーに対応した“ちいばす”が走る。

作成年度：平成21年度

写真上：昭和6年(1931年) ◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：麻布鳥居坂警察署誌)

写真下：平成21年(2009年)

国立新美術館（旧東大生研）



明治 40 年

出典：東京写真帖



昭和 37 年

写真提供：東京大学生産技術研究所

東京大学の附置研究所である生産技術研究所は、昭和 37 年（1962 年）に六本木の旧歩兵第三連隊兵舎へ移転し、平成 13 年に駒場第 2 キャンパスへ移転するまで立地していた。

また、隣地を昭和 32 年より拠点としていた同物性研究所は、平成 12 年に柏キャンパスに移転した。



昭和 63 年

写真提供：東京大学生産技術研究所

その後、東大物性研跡地には平成 17 年に政策研究大学院大学が立地し、東大生研跡地には平成 19 年に国立新美術館が開館した。

平成 21 年



手前が政策研究大学院大学、奥が国立新美術館。

←政策研究大学院大学から国立新美術館を望む。

作成年度：平成 21 年度

写真左上：明治 40 年（1907 年）

◇写真提供：港区立港郷土資料館（出典：東京写真帖）

写真左中：昭和 37 年（1962 年）

◇写真提供：東京大学生産技術研究所

写真左下：平成 21 年（2009 年）

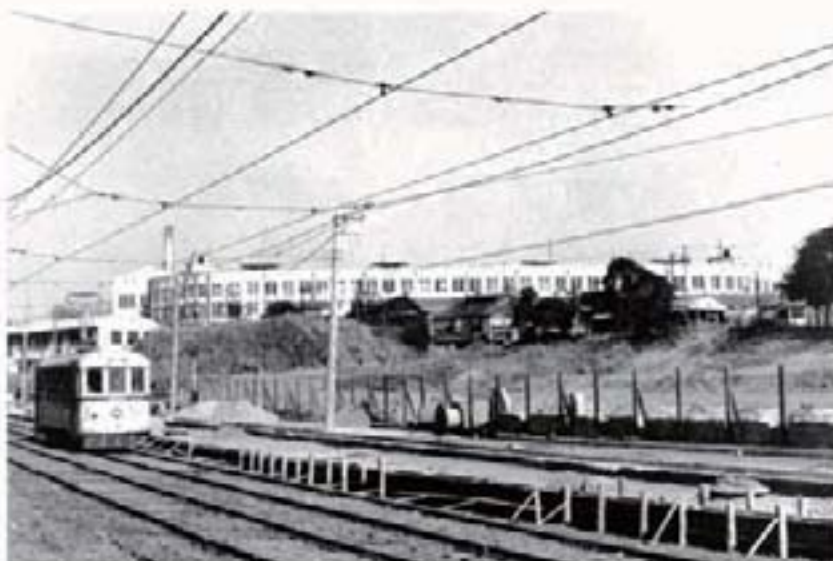
写真右上：昭和 63 年（1988 年）

◇写真提供：東京大学生産技術研究所

写真右下：平成 21 年（2009 年）

六本木周辺

ヘリポート前の空（六本木7丁目）



昭和 37 年

出典：みなと写真散歩

昭和 33 年（1958 年）に在日米軍が接收解除した後の新電土町。右手は現在の都立青山公園、奥には旧歩兵三連隊兵舎（昭和 37 年に東京大学生産技術研究所が移転）の建物が見える。

都立青山公園は、昭和 45 年（1970 年）に整備・開園されたが、大部分は在日米軍赤坂プレスセンター（星条旗新聞社）及びヘリポートに占有されている。



平成 21 年

現在、都立青山公園からは、ヘリポートを挟み政策研究大学院大学と六本木ヒルズの間にある青い空を望むことができる。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 37 年（1962 年）

◇写真提供：港区立港郷土資料館（出典：みなと写真散歩）

写真下：平成 21 年（2009 年）

六本木ヒルズ周辺



昭和 37 年

出典：みなと写真散歩

テレ朝通りから当時の材木町交差点を望む。道の左右、正面には小さな商店が軒を連ねる。



平成 21 年

現在のテレ朝通りと六本木6丁目交差点付近。小さな商店はなくなり、ビルが立並ぶ。



作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 37 年(1962 年)

◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：みなと写真散歩)

写真下：平成 21 年(2009 年)

六本木周辺

東京大学物性研究所（現 政策研究大学・国立新美術館）



平成 11 年：六本木上空から



平成 23 年：六本木ヒルズから
周りに高い建物が建って、景色も一変している。



東京大学六本木キャンパス（イメージ）
物性研は平成 11 年（1999 年）まで、
六本木に屋を構えていた。

- ①物性研 A 棟（左）平成 10 年頃。（右）平成 23 年：今はモダンな政策研究大学物性研究所が建ち、多くの留学生も学んでいる。
- ②物性研 B 棟（左）平成 10 年頃。（右）平成 22 年：棟の一部が国立新美術館の別館として残されている。
- ③正門（左）平成 10 年頃。（右）平成 23 年：最先端科学の研究所は地に根を張り、今は政策研究のスペシャリストも育っている。
- ④正門から（左）平成 10 年頃。（右）平成 23 年：冷暖房は夏になると、プール代わりに使っている人もいた。
- ⑤テニスコート 平成 10 年頃（手前）！奥が物性研のテニスコートだった。
- ⑥中庭 平成 11 年：ウサギや大きな尻尾の猫が住んでいた。

（イメージ）2011 年 10 月撮影（左）東京大学物性研究所（右）国立新美術館

作成年度：平成 22 年度

写真左上：平成 11 年（1999 年） 六本木上空から ◇写真提供：東京大学物性研究所（長谷川幸雄 氏）

写真右上：平成 23 年（2011 年） 六本木ヒルズから

写真下（左列及び一番下段）：平成 10 年（1998 年）頃 ◇写真提供：東京大学物性研究所（長谷川幸雄 氏）

写真下（真ん中列）：平成 23 年（2011 年）

六本木七丁目（東京ミッドタウン西交差点）



平成 10 年(1998 年)頃: 東京ミッドタウンがオープンする以前の風景(現在の東京ミッドタウン西交差点)



平成 23 年(2011 年)

東京ミッドタウンのオープン後、向かい側に建っていたマンションを含めたいくつものビルが取り壊された。現在は、暫定的に外国車のショールームとなっている。国立新美術館への入口となるこの交差点周辺は、今後、道路も拡張され、大規模な再開発が予定されている。

作成年度：平成 24 年度

写真上：平成 10 年(1998 年)頃 東京ミッドタウンがオープンする以前の風景(現在の東京ミッドタウン西交差点)

写真下：平成 23 年(2011 年)

六本木周辺

防衛庁→東京ミッドタウン



平成 9年(1997年)頃: 防衛庁



平成 23年(2011年): 東京ミッドタウン

江戸時代、毛利家の下屋敷であったこの地は、その後、日本陸軍歩兵第一連隊の兵舎として利用されていた。終戦後は、連合国の占有を経て、長年の間「防衛庁」があった。
平成 19年(2007年)に東京ミッドタウンがオープンし、これまでにない賑わいを見せている。

作成年度：平成 24 年度

写真上：平成 9 年(1997 年) 防衛庁

写真下：平成 23 年(2011 年) 東京ミッドタウン

東京大学生産技術研究所→国立新美術館



昭和 57年(1982年)：東京大学生産技術研究所・東京大学物性研究所

写真提供：小山浩氏

昭和 3年(1928年)に日本陸軍の歩兵第三連隊の兵舎として竣工したこの建物は、昭和 11年(1936年)まで陸軍が駐屯、まさに軍隊のまち「麻布」の象徴であった。
終戦後は連合軍が接收。昭和 37年(1962年)から東京大学生産技術研究所(一部は物性研究所)として利用されていた。



平成 23年(2011年)：国立新美術館

東京大学生産技術研究所は、平成 13年(2001年)に駒場キャンパスへ移転。
建物は取り壊され、現在は国立新美術館になっている(建物の一部は記念に残され、別館として利用されている)。

Copyright © K. Nakano

作成年度：平成 24 年度

写真上：昭和 57 年(1982 年) 東京大学生産技術研究所・東京大学物性研究所

◇写真提供：小山浩氏

写真下：平成 23 年(2011 年) 国立新美術館



昭和 57年(1982年)

かつて芋洗屋があったことから、この名前が付いたと言われる。

写真提供：港区港郷土資料館



平成 18年(2006年)

六本木交差点と六本木ヒルズを結ぶ道であるが、この頃は電線地中化前で、歩道も狭く歩きにくかった。画面の奥には、既に東京ミッドタウンが建っている。

写真提供：港区港郷土資料館



平成 23年(2011年)

電柱と電線がすべて地下に埋められ、歩道も広くなり、街路灯やポラード(車止め)等も新しく整備された。

Copyright © 2011

作成年度：平成 24 年度

写真上：昭和 57 年(1982 年) ◇写真提供：港区港郷土資料館

写真左下：平成 18 年(2006 年) ◇写真提供：港区港郷土資料館

写真右下：平成 23 年(2011 年)

東京タワー



昭和 57年(1982年)

写真提供：六本木商店街振興組合

東京タワーは昭和 33年(1958年)に竣工した電波塔で、地上 333mは自立型建造物高さ日本一を誇っていた。



平成 23年(2011年)

スタイルも少し変わり、照明イメージは大きく変わったが、今も変わらず東京のシンボルである。手前に見えるまちなぎの夜景も変わった。



平成 24年(2012年)：昼間の景色

作成年度：平成 24 年度

写真左上：昭和 57 年(1982 年)

◇写真提供：六本木商店街振興組合

写真右上：平成 23 年(2011 年)

写真下：平成 24 年(2012 年)

六本木周辺

文人の足跡をたずねて（龍土軒）



平成 24 年(2012 年)：龍土軒発祥の地 [六本木 7-4-4]



昭和 56 年(1981 年)：
龍土軒遺墨

美術評論家の岩村通が麻布羅士町のフランス料理店「龍土軒」で開いていた洋画家たちのサロンに、若い文字者たちが会済するがたちで、明治 37年(1904年)11月から「龍土会」が始まった。龍土会には国木田獨步、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、徳田秋声など当時の文豪たちも参加し、芸術談義を交わした。当時の自然主義作家のほとんどが来会したので、「自然主義は龍土軒の灰皿の中から生まれた」とさえ言われた。龍土軒は現在は西麻布に移転して



平成24年(2012年)



昭和 56 年(1981 年)：龍土軒近景

与真海部: 0.002 的乘积
与真海部: 0.002 的乘积

作成年度：平成 24 年度

写真左上：平成 24 年(2012 年) 龍土軒発祥の地(六本木 7-4-4)

写真右上：昭和 56 年(1981 年) 龍土軒遠景 ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左下：平成24年(2012年)

写真右下：昭和 56 年(1981 年) 龍土軒近景 ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

高いところから麻布



昭和 39年(1964年)：六本木五丁目付近

左側に見える広い道路は現在の永坂。その後、ここに高速道路が作られた。中央を縦に走る道は、麻布地区総合支所の正副出入口がある鳥居坂通り。左手に東洋英和女学院の校舎と校庭。右手には国際文化会館の建物と庭園が見えている。



星屋方面



谷町ジャンクション方面



六本木ヒルズ方面



新橋方面



平成 24年(2012年)：六本木五丁目

ロアビル上層階より、ほぼ同じ方向で撮影。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 39 年(1964 年) 六本木五丁目付近 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真右上(4 点とも)：平成 24 年(2012 年) アークヒルズ仙石山森タワーから

写真左下：平成 24 年(2012 年) 六本木五丁目(ロアビル上層階から撮影)

鳥居坂ものがたり

港区麻布地区総合支所や東洋英和女学院が置かれるここ鳥居坂周辺は、江戸から明治・大正・昭和にかけての歴史文化に深く関わる人びとの屋敷や施設が置かれ、近代の日本において、極めて特筆すべき地区である。「麻布実業写真館」の事業「鳥居坂ものがたり」として、その一端を残された写真と共に振り返りを見ていくこととした。

外苑東通りと鳥居坂

外苑東通りは江戸時代、お城の西に位置し、尾根道としての地形的環境（周囲よりも高い位置にある）から武家屋敷が軒を連ねた、尾根道として坂手はすぐに低地に向かってしまう中で、鳥居坂へのこの道は現六本木5丁目交差点から約500mの間、その高さを維持する珍しい通りであった。ゆえに外苑東通り同様、大名や武家屋敷が置かれていた。

当時の鳥居坂周辺地区の特色

1. 江戸時代、大名や武家屋敷が並ぶ一方、坂下には町人の家が並ぶような地形的配置となっていた。
2. かつて大名屋敷であった広大な土地が、明治維新後、封閑等に払い下げとなり、三井、三菱、住友の三財閥の関係者が顔をそろえることとなった。
3. 同じく、三権部をはじめとする公家や、李王家、久通宮家などの宮家、といった華族邸が並んだ。
4. 富貴層の人々により、著名建築家・設計者の手による貴重な屋敷や建物が建てられた。

名前由来

右の写真は、現在（平成22年）の鳥居坂である。鳥居坂の名の由来は、慶長の初期に鳥居（鳥井）部右衛門元忠が坂の東側（写真では右側）に屋敷を拝領していたからだといわれている。また、一説では永川神社の二の鳥居があったから、あるいは三の鳥居があったからともいう。

もともと坂はなかった

左の縮宝（1673～1681）図によると、この通りは突き当たりであり、鳥居坂はなかった。その後の元禄版の江戸図（元禄12年（1699年））になって、現在の鳥居坂の道が描かれる。これにより、今の鳥居坂ができたのは、元禄の少し前頃、鳥居家の敷地を一部つぶして道としたものと思われる。



縮宝（1673～1681）



元禄12年（1699）

作成年度：平成22年度

写真右中：平成22年（2010年）

写真左下（地図）：延宝年間（1673～1681年）

写真右下（地図）：元禄12年（1699年）

麻布小学校 / 麻布区役所

小学校から区役所へ

港区麻布地区総合支所がある場所は以前麻布小学校が置かれていた。

明治 36 年：麻布小学校

昭和 8 年：麻布尋常小学校

昭和 10 年：麻布区役所が市兵衛町 2 丁目
(現在の六本木 3 丁目) から移転

昭和 22 年：港区役所麻布支所
(平成 18 年からは麻布地区総合支所)



明治 36 年(1903 年)：麻布小学校



市兵衛町時代の麻布区役所(明治 42 年竣工)

区役所が鳥居坂に移転する際、この建物は、武蔵野市にある日本獣医生命科学大学に移転された。



平成 22 年：日本獣医生命科学大学

昭和 12 年に移転した建物は、戦禍を避け、今も校舎として残存している。



市兵衛町時代の麻布区役所(明治 42 年竣工) / 昭和 10 年(1935 年)頃 / 港区麻布地区総合支所



平成 22 年：港区麻布地区総合支所
←昭和 10 年(1935 年)頃：麻布区役所

作成年度：平成 22 年度

写真上：明治 36 年(1903 年) 麻布小学校 ◇写真提供：港区立麻布小学校

写真左中：市兵衛町時代の麻布区役所(明治 42 年竣工) ◇出典：港区議会史 通史編

写真右中：平成 22 年(2010 年) 日本獣医生命科学大学

写真左下：昭和 10 年(1935 年)頃 麻布区役所 ◇出典：港区議会史 通史編

写真右下：平成 22 年(2010 年) 港区麻布地区総合支所

ミス・カートメルのお来日

カナダ・メソジスト教会(現在のカナダ合同教会)婦人伝道会社から派遣された宣教師ミス・カートメルは、明治15年(1882年)横浜に上陸すると、開地明石町に居を構え日本語の学習を始めた。その後日曜学校、バイブルクラスや若い女性の集いの指導を行なった。

東京で宣教活動続けるうちに当時の日本女性が教育を受ける機会に恵まれていない事に気づいた。

東洋英和の発祥

折しも明治16年(1883年)、カナダ・ミッション(カナダ・メソジスト教会伝道会社)のカックラン、マクドナルドの高氏が東京麻布に学校(男子校)の開設を計画しており、その建設予定地、東鳥居坂町13番地の下、14番地にビール醸造場の跡地があった。

明治17年(1884年)カートメルはマクドナルドの協力を得て、この地に女学校を設立した。



明治18年(1885年)：設立当時の校舎



明治18年(1885年)：東鳥居坂14番地付近
高地には東洋英和学校(男子校)が見える。



平成22年：鳥居坂下付近

鳥居坂の通りへの移転

東洋英和学校(男子校)は明治28年(1895年)、普通科生徒によって麻布尋常中学校を設立した。明治33年(1900年)9月には英和学校から分離、キャンパスを麻布本村町に移して麻布中学校となり、ミッションとの関係を薄めていった。この中学校が現在の麻布学園である。

この時期に東洋英和女学校は現在の鳥居坂の通りに面した場所に移転する。東洋英和女学校の跡地は、明治末年には高木兼寛の所有になっていた。彼は男子校のあった13番地と女学校のあった14番地をまとめて所有、東洋英和学校の旧校地も高木邸という広大な邸宅地へと変貌していった。

高木兼寛は従軍醫士で海軍軍医總監に任ぜられ、後に現在の東京慈恵会医科大学を創立、貴族院議員等を歴任し、男爵も授けられている。

《鳥居坂の通りについて》写真提供：東洋英和女学院

作成年度：平成22年度

写真左中：明治18年(1885年) 設立当時の校舎 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真右中：明治18年(1885年) 東鳥居坂14番地付近 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真左下：平成22年(2010年) 鳥居坂下付近

東洋英和女学院②

鳥居坂デビュー

現在東洋英和女学院の建っている場所は、17世紀後半から明治維新までの間は戸田家の屋敷であった。その場所(当時の東鳥居坂町8番地)は明治33年(1900年)、木造4階建ての新校舎が落成した。



明治33年(1900年)：東鳥居坂町8番地の新校舎(左右とも)



大正3年(1914年)：裏手部分に増築、園舎とし幼稚園を開園した。写真は平成22年：現在の風景



昭和8年(1933年)：ヴォーリスの設計による新校舎。このころ鳥居坂の通りにはガス灯が設置されていた。

建築家ヴォーリス設計の新校舎へ

昭和8年(1933年)には、建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリスの設計による校舎が完成した。ヴォーリスは明治学院大学礼拝堂など、日本各地で数多くの西洋建築の設計を手懸けた。

ヴォーリス設計の新校舎は、スパニッシュミッション・スタイルが建築デザインの基調となっており、特に鳥居坂通りに面する西側正面の外観は、軒のスパニッシュ瓦、外壁の色付きセメント・スタッコ塗り壁を施し、連続する半円アーチ形窓および出入口が様式的な特徴を表している。また外壁面の所々に配されたレリーフ、飾り窓の手廻り、建物前面を囲いフレーザー状の曲線をつくり空間に連続するロータ・アイアンの飾り手廻り(金具類として戦中に供出)など装飾的意匠が表情豊かに配され、格調高い華やかさを添えていた。



手前より幼稚園、伝道館、西洋教師館、寄宿舎「青楓寮」

さらなる発展・拡大

東洋英和女学院は順調に見出し、それにともない学舎施設の不足が明らかとなった。昭和4年(1929年)、在日本カナダ・メジスト宣教師社団は東鳥居坂町2番地の土地を鍋島桂次郎から購入、東洋英和女学院は新たなキャンパスの建築計画を立てていく。

外苑通り(現)に面する東鳥居坂町2-1の土地は、明治末年は鍋島桂次郎の所有であるが、同年の地籍図には三井財閥の幹部であった福井菊三郎の名も記されている。新校舎の完成に先立つ昭和7年(1932年)、ヴォーリスの設計による幼稚園、伝道館、西洋教師館ならびに寄宿舎「青楓寮」が竣工した。東鳥居坂2番地の施設等は、昭和15年(1940年)に東洋英和に譲渡され、戦時中の没収を免れた。戦後、在日本カナダ合同教会宣教師社団に譲渡されたが、昭和49年(1974年)に同社団より土地を購入、その後、六本木5-16-5(旧東鳥居坂2番地)の敷地は、昭和55年(1980年)に売却された。



平成22年

(左) 六本木5-16-5(旧東鳥居坂2番地)の敷地は、昭和55年(1980年)に売却された。

作成年度：平成23年度

写真左上(2枚)：明治33年(1900年)東鳥居坂町8番地の新校舎 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真左上中(左)：大正3年(1914年)幼稚園 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真左上中(右)：平成22年(2010年)

写真右上：昭和8年(1933年)ヴォーリスの設計による新校舎 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真右中：寄宿舎「青楓寮」等 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真右下：平成22年(2010年)寄宿舎「青楓寮」があった付近

三重の塔の川崎邸

鳥居坂町 2-1 には二代目川崎八右衛門邸があった。同氏は戦前、川崎金融グループの総帥として第百銀行(昭和 11 年川崎第百銀行から改称)、日本火災(現:損保ジャパン日本興亜)、第百生命等を率いていた。第百銀行は昭和 18 年三菱銀行と合併している。川崎邸にあった三重の塔は関東大震災にも耐えたが、東京大空襲時に消失した。



平成 22 年
塔は現存しないが、堀(三條邸)は今も残っている。

天文台のある小田邸

山尾家の東側、すなわち永堀側の土地(6番地と7-1番地)は三井十一家のうちの永堀町家の三井守之助邸があった。しかし、この土地は大正末年には小田良治邸となっている。三井守之助邸は永堀町 1 番地に移ったのである。小田良治は土地を入手するや大正 13 年(1924 年)に、アメリカ人建築家ガーディナーの設計による天文台付きの洋館を建設した。小田は三井物産札幌出張所長などをつとめ、北海道で鉱山経営にもあたった。札幌にもガーディナーの設計による邸宅を大正 4 年(1915 年)頃に建てている。その後、札幌で初めての近代的大邸宅である「五番館」を経営した。五番館は百貨店札幌店となっていたが、平成 21 年(2009 年)9 月末に閉店した。五番館の時代から遡ると 100 年以上に歴史を持つ。



平成 22 年:現在のフィリピン大使館



昭和 7 年(1932 年)
奥の三重の塔が川崎邸。手前は建築中の東洋英和女学校。



昭和 7 年(1932 年)
中央部の丸い建物が小田邸の天文台。手前は建築中の東洋英和女学校。



昭和 58 年(1983 年)
小田邸は、天文台もそのままに、一時フィリピン大使館として利用されていた。

作成年度:平成 22 年度

写真左上:平成 22 年(2010 年)

写真右上:昭和 7 年(1932 年) ◇写真提供:東洋英和女学院

写真右中:昭和 7 年(1932 年) ◇写真提供:東洋英和女学院

写真左下:平成 22 年(2010 年)

写真右下:昭和 58 年(1983 年) ◇写真提供:小山浩氏

鳥居坂教会



明治から大正時代：新築された麻布教会会堂
場所は、現在の東洋英和女学院東門付近。ここにもガス灯がある。



平成 22 年：当時教会があった場所

永坂孤女院

教会の日常活動として、近隣社会への伝道奉仕活動を展開していた中で、明治 27 年(1894 年)頃までに近隣の貧困児童の教育施設である「恵風学校(恵風女学校)」、「孤女院」が麻布一本松に設立された。
恵風学校が明治 36 年(1903 年)に廃校となった後も孤女院は置かれ、明治 41 年(1908 年)に永坂町 50 番地に新設された「日曜学校」の 2 階に孤女院は移転、名称を「永坂孤女院」とした。
孤女院は、大正 12 年(1923 年)の関東大震災で一時間閉鎖されたが、翌年には再開し、昭和 3 年(1928 年)に「永坂ホーム」と改称した。

鳥居坂教会・永坂孤女院と東洋英和

鳥居坂教会(旧麻布教会)が東洋英和女学校の地続きにあった頃、生徒達は全員、日曜日には麻布教会の聖日礼拝に出席していました。麻布教会で受礼し、卒業後も教会員として深い関わりを持った者も多かったようです。また、恵風学校と永坂孤女院の設立・運営は東洋英和女学校の宣教師、生徒たちの働きによるところが大きかったようです。

日本キリスト教団鳥居坂教会

明治 16 年(1883 年)：マクドナルド宣教師が永坂町 50 番地に「基地教会講義所」を設立。

明治 18 年(1885 年)：同所に「麻布教会堂」新築。

明治 22 年(1889 年)：「麻布教会会堂」新築落成。

大正 12 年(1923 年)：関東大震災で大破損し、同所に再建。

昭和 17 年(1942 年)：法改正に基づき名称を「日本メソジスト麻布教会」から「日本キリスト教団鳥居坂教会」に変更。

昭和 20 年(1945 年)：戦災で消失。

昭和 23 年(1948 年)：重久源家跡(現在の六本木 5-6-15)に教会堂を建設することが決定。

昭和 25 年(1950 年)：新会堂献堂式。



明治 41 年(1908 年)：永坂孤女院

(左から右へ) 明治 41 年(1908 年)の永坂孤女院、東洋英和女学院

作成年度：平成 23 年度

写真上：明治から大正時代 新築された麻布教会会堂 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真中：平成 22 年(2010 年)

写真下：明治 41 年(1908 年) 永坂孤女院 ◇写真提供：東洋英和女学院

麻布地区における洋館

麻布地区には西洋建築の建物がいくつもあった。1980年代には多くの洋館を見ることができた。

六本木5丁目①

島国坂の通りに面している個人宅。平成23年撮影の建物も当年中に取り壊された。



昭和59年(1984年)



昭和59年(1984年)



平成23年

六本木5丁目②

島国坂の通りに面し、かなり最近まで残っていた建物である。



昭和59年(1984年)



昭和59年(1984年)



平成23年

この写真の撮影は、写真提供：小山浩氏

作成年度：平成23年度

写真左上：昭和59年(1984年) 六本木5丁目 ◇写真提供：小山浩氏

写真右上(上)：昭和59年(1984年) 六本木5丁目 ◇写真提供：小山浩氏

写真右上(下)：平成23年(2011年)

写真左下：昭和59年(1984年) 六本木5丁目 ◇写真提供：小山浩氏

写真右下(上)：昭和59年(1984年) 六本木5丁目 ◇写真提供：小山浩氏

写真右下(下)：平成23年(2011年)

六本木と周辺の山坂 なだれ坂



昭和59年(1984年):なだれ坂 坂下の景



平成25年(2013年)



昭和50年(1975年):なだれ坂 坂下を



平成25年(2013年)



平成25年(2013年)



昭和50年(1975年)



平成25年(2013年)

:なだれ坂 坂下から

流石・奈太礼・長重などを書いた。土崩れがあったためか、幸国(寺)坂、市兵衛坂の別名もあった。

参考資料:港区産業観光ネットワークMEXATOからと<http://www.minato-ola.net/>など
このパネルに掲載されている古い写真については、写真撮影:田口政典氏、写真提供:田口重久氏



作成年度:平成 25 年度

写真左上:昭和 59 年(1984 年) なだれ坂 坂下の景 ◇写真撮影:田口政典氏 / 写真提供:田口重久氏

写真右上:平成 25 年(2013 年)

写真左中:昭和 50 年(1975 年) なだれ坂 坂下を ◇写真撮影:田口政典氏 / 写真提供:田口重久氏

写真中中:平成 25 年(2013 年)

写真右中:平成 25 年(2013 年)

写真左下:昭和 50 年(1975 年) なだれ坂 坂下から ◇写真撮影:田口政典氏 / 写真提供:田口重久氏

写真右下:平成 25 年(2013 年)

六本木周辺

六本木と周辺の山坂 丹波谷坂〔たんばだにざか〕



昭和 59年(1984年)：丹波谷坂 標柱近景



平成 25年(2013年)



昭和 59年(1984年)
：丹波谷坂 坂上から



平成 25年(2013年)



昭和 50年(1975年)
：丹波谷坂 坂下から



平成 25年(2013年)

元和年間(1615~1623)旗本阿部丹波守の屋敷ができ、坂下を丹波谷といった。明治初期この堰を開き、各の名から堰の名称とした。

参考資料：江戸時代参勤交代の道 <http://www.sankin-kwado.com/> 丹波谷
江戸時代参勤交代の道 <http://www.sankin-kwado.com/> 丹波谷



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 59 年(1984 年) 丹波谷坂 標柱近景

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真中中：昭和 59 年(1984 年) 丹波谷坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 25 年(2013 年)

写真左下：昭和 50 年(1975 年) 丹波谷坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 25 年(2013 年)

六本木と周辺の山坂 寄席坂〔よせざか〕



昭和 57 年(1982 年): 喜鷹坂 坂下から



平成 25 年 (2013 年)



昭和 57 年 (1982 年)
：喜度坂 坂下を



平成 25 年(2013 年)

坂の途中の北側に明治から大正三年にかけて福井亭という
番屋があったために、番屋坂とよびならわすようになった。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 57 年(1982 年) 寄席坂 坂下から ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真左下：昭和 57 年(1982 年) 寄席坂 坂下を ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 25 年(2013 年)

六本木周辺

六本木と周辺の山坂 芋洗坂〔いもあらいざか〕



昭和 62年(1987年) :
芋洗坂 ストライブハウス美術館付近



平成 25年(2013年)



平成 26年(2014年)

正しくは、麻布警察署裏へ上る道をいったが、六本木交差点への道が明治以後にできて、こちらをいう人が多くなった。芋洗屋があったからという。

参考資料: 麻布警察署裏へ上る道をいったが、六本木交差点への道が明治以後にできて、こちらをいう人が多くなった。芋洗屋があったからという。
この六本木は明治時代に作られたもので、当時の六本木は、今の六本木とは全く異なる場所であった。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 62 年(1987 年) 芋洗坂 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真下：平成 26 年(2014 年)



昭和 50年(1975年)：御組坂 坂上から



平成 25年(2013年)



昭和 50年(1975年)：御組坂 坂下から



平成 25年(2013年)



昭和 59年(1984年)
：御組坂 標柱近景



平成 24年(2012年)

幕府御先手組(おさきてぐみ：戦時の先鋒部隊で、常時は放火・盗賊を取り締まるなどの治安維持等を務める)の盤敷が角地にあったので坂名となった。
御組坂下付近に永井荷風が住んでいた御奇館があった(戦災で消失)。



六本木地区の歴史をたどる「六本木地区の歴史」
(2014年4月に発行)の10ページ「六本木の歴史」に、御組坂の歴史が紹介されています。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 御組坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真左中：昭和 50 年(1975 年) 御組坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 25 年(2014 年)

写真左下：昭和 59 年(1984 年) 御組坂 標柱近景

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 24 年(2012 年)

六本木周辺

六本木と周辺の山坂 三谷坂「さんやざか」



昭和 50年(1975年)：三谷坂 坂上から



平成 25年(2013年)



平成 26年(2014年)



昭和 50年(1975年)
：三谷坂 坂上から



昭和 50年(1975年)
：三谷坂 坂上から

アークヒルズの近くの坂で、坂下はもとの麻布谷町である。今「谷町」という名前は高速道路の谷町ジャンクションにしか残っていない。谷町より以前は今井三谷町とよばれていたそうでこれが坂の由来であろう。



東京府の地図(明治30年)より「三谷坂」の位置を示す。この地図は、東京府の地図(明治30年)より「三谷坂」の位置を示す。この地図は、東京府の地図(明治30年)より「三谷坂」の位置を示す。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 三谷坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真右中：昭和 50 年(1975 年) 三谷坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真中央中：昭和 50 年(1975 年) 三谷坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真左下：平成 26 年(2014 年)

麻布の階段・抜け道（六本木）



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



平成25年(2013年)：六本木三丁目付近



平成25年(2013年)：六本木三丁目付近



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



平成25年(2013年)：六本木四丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：六本木三丁目付近

作成年度：平成 25 年度

写真①：六本木五丁目付近

写真②：六本木三丁目付近

写真③：六本木三丁目付近

写真④：六本木四丁目付近

写真⑤：六本木六丁目付近

写真⑥：六本木五丁目付近

写真⑦：六本木三丁目付近

写真⑧：六本木五丁目付近

写真⑨：六本木六丁目付近

写真⑩：六本木六丁目付近

写真⑪：六本木六丁目付近

写真⑫：六本木五丁目付近

写真⑬：六本木三丁目付近

撮影年：平成 25 年(2013 年)

六本木周辺

六本木周辺の山坂と窪地



昭和50年(1975年)：市三坂 坂下から



平成25年(2013年)：市三坂 坂下から



昭和50年(1975年)：市三坂 坂上から



平成26年(2014年)：市三坂 坂上から



昭和50年(1975年)：
間魔坂 坂下から



平成26年(2014年)：
間魔坂 坂下から



作成年度：平成26年度

写真左上：昭和50年(1975年) 市三坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成25年(2013年) 市三坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左中：昭和50年(1975年) 市三坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右中：平成26年(2014年) 市三坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左下：昭和50年(1975年) 間魔坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右下：平成26年(2014年) 間魔坂 坂下から

日本経緯度原点（麻布台2丁目）

明治 40 年

日本の天文測量が始まった場所として、科学技術史及び文化史上、意義深い場所。



出典：東京写真帖



出典：東京写真帖

ここには日本の経度・緯度を決める基準となる日本経緯度原点が設置されている。

明治 7 年、海軍の観象台が置かれた。明治 21 年に内務省地理局の天文台と合併し、東京帝国大学附属東京天文台となった。原点の位置は、天文観測用に用いられた機器である「子午環」の中心位置にあたる。

その後、大正 13 年、都市化とともに観測に適さなくなった東京天文台は、現在の三鷹に移転したが、子午環跡は国土地理院が日本経緯度原点として引継ぎ、現在も日本の地図測量の原点として利用されている。



平成 21 年

現在は、国土地理院関東地方測量部が管理。花崗岩の台石に金属板をはめ、+印の位置地点の表示がある。

※注

東経 139 度 44 分 28 秒 8759
北緯 35 度 39 分 29 秒 1572



作成年度：平成 21 年度

写真上(2点)：明治 40 年(1907 年) ◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：東京写真帖)

写真下(2点)：平成 21 年(2009 年)

※注 日本経緯度原点は平成 23 年(2011 年)3 月 11 日に起きた東日本大震災により真東に 27cm 移動したことが記され、その数値は平成 23 年 10 月 21 日に改定されました。

(経度：東経 139° 44′ 28″ .8869、緯度：北緯 35° 39′ 29″ .1572、方位角：32° 20′ 46″ .209)

麻布台周辺

アメリカンクラブ（麻布台2丁目）



昭和 46 年

写真提供：東京アメリカンクラブ

現在建築中の2代前の建物。昭和3年（1928年）に設立された東京アメリカンクラブは、昭和29年に麻布台2丁目（当時：麻布狸穴町）に移転してきた。



平成 21 年

現在はクラブハウスの老朽化に伴い、建替えプロジェクトが進められている。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 46 年（1971 年） ◇写真提供：東京アメリカンクラブ

写真下：平成 21 年（2009 年）



昭和 34 年：赤羽橋



「増上寺塔赤羽橋」
『名所江戸百景』
初代・歌川広重作
(改印＝安政 4 年 1 月)
増上寺の一角にあった五重
塔をかすめて、赤羽川（古
川）の向こうを望む構図。
塔は昭和 20 年、戦災で焼失
した。川の左手に描かれて
いるのは久留米藩・有馬公
の上屋敷。彼方には同藩の
火の見櫓と水天宮（櫓が数
本立つ）が見える。
（※現在の福岡県博多）



出典：『名所江戸百景』歌川広重作（改印）（東京：丸文堂）



（左上）平成 22 年：赤羽橋から麻布方面を望む。
六本木ヒルズをはじめとする高層ビルが立ち並ぶ。
（左下）平成 22 年：赤羽橋交差点
古川の上を首都高速が通る。上空からは川を見ることができない。

作成年度：平成 22 年度

写真上：昭和 34 年（1959 年） 赤羽橋 ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真左中：平成 22 年（2010 年） 赤羽橋から麻布方面を望む

写真左下：平成 22 年（2010 年） 赤羽橋交差点

写真右中：「増上寺塔赤羽橋」『名所江戸百景』 初代・歌川広重作（改印＝安政 4 年 1 月）

◇出典：『平成 18 年度特別展 UKIYO-E 一名所と版元一』

麻布台周辺

江戸時代の観光名所 飯倉交差点付近 浮世絵から現代



明治 40 年：飯倉四辻



平成 22 年：飯倉交差点
不思議な形をした「NDA ビル」。



昭和 34 年：飯倉交差点



平成 22 年：赤羽橋へ下る小道
の途中で見えた東京タワー。



「飯倉四ッ辻」
『東京名所四十八景』 昇斎一景作(明治 4 年)
現在の飯倉交差点は交通の要衝であるが、画中には町人や行商人など、様々な人びとが行き交う様子が描かれている。絵の左下に見えるのは江戸湾(現東京湾)。



平成 22 年：飯倉交差点から赤羽橋方面を望む。
右上に見える「319」の表示は、東京都道 319 号環状三号線の標識。

作成年度：平成 22 年度

写真左上：明治 40 年(1907 年) 飯倉四辻 ◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：東京案内)

写真右上：平成 22 年(2010 年) 飯倉交差点

写真左中：昭和 34 年(1959 年) 飯倉交差点

写真右中：平成 22 年(2010 年) 赤羽橋へ下る小道の途中で見えた東京タワー

写真左下：「飯倉四ッ辻」「東京名所四十八景」 昇斎一景作(明治 4 年)

◇出典：『平成 18 年度特別展 UKIYO-E 一名所と版元一』

写真右下：平成 22 年(2010 年) 飯倉交差点から赤羽橋方面を望む



「赤羽」

江戸「江戸名所図会」 港区立港郷土資料館蔵



平成 23 年：六本木ヒルズ展望台から左の「江戸名所図会」の方向に近いように撮影した現在の風景。



昭和 39 年頃：上空から見た六本木 5 丁目付近

港区立港郷土資料館蔵



平成 23 年：浜松町貿易センタービル展望台から麻布方向を望む。

赤羽橋（空からの麻布）

江戸末期に長谷川雪旦により描かれた「江戸名所図会」の「赤羽」は、現在の赤羽橋付近を中心に、高所から見下ろしたように描かれ、海が現在と比べ近くにあった様子がうかがわれる。絵図の中央下に見える心光院は移転されている。この絵図から、視点を覚えて、高所から見た麻布について着目してみた。



平成 23 年：六本木ヒルズ展望台からの眺め、熱帯魚「カクレクマミノ」との風景。

作成年度：平成 23 年度

写真左上：「赤羽」 ◇出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵

写真右上：平成 23 年（2011 年） 六本木ヒルズ展望台から左の『江戸名所図会』の方向に近いように撮影した現在の風景

写真左中：昭和 39 年（1964 年）頃 上空から見た六本木 5 丁目付近 ◇写真提供：東洋英和女学院

写真右中：平成 23 年（2011 年） 浜松町貿易センタービル展望台から麻布方面を望む

写真右下：平成 23 年（2011 年） 六本木ヒルズ展望台からの眺め

麻布台周辺

文人の足跡をたずねて（永井荷風）



昭和 54年(1979年)：
偏奇館跡近景(永井荷風旧居跡)

写真撮影：田口政典氏
写真提供：田口重久氏

大正 9年(1920年) 麻布市兵衛町一丁目に新築した木造二階家に移り住んだ荷風は、その家がペンキで塗られていたことから「偏奇館」と名づけ、障子・襖・畳のない、台所を広くした洋風の家の中で、隠棲するような暮らしを始めた。
大正 12年には関東大震災が起きましたが、偏奇館は無事だった。昭和初期からは執筆意欲が旺盛になり、『つゆのあとさき』、『ひかげの花』、『運東純譚』など数々の代表作が、ここで生み出された。しかし昭和 20年(1945年) 3月 10日の東京大空襲で消失し、荷風は遺書などほとんどのものを失った。26年にわたる偏奇館時代は終わりを告げ、その後荷風が港区に買えることはなかった。現在は居ガガーデンとなり、港区教育委員会の石碑が立っている。
荷風は「偏奇館漫録」と題した文章のなかで、「独居に便なり」「隠棲に過せり」「独り室に侍るも愁思少し」「稼(をむる)に病を養ひ静かに書を読むによし」「午睡を食るによし」などと記している。

参考文献：「港区中から大人物データベース」(<http://www.khu-city-museum.jp/yakuhin/>)
「港区歴史資料データベース」(<http://www.khu-city-museum.jp/yakuhin/>)



平成 23年(2011年)：永井荷風旧居跡(六本木 1-6)



昭和 54年(1979年)：
突き当たり右が偏奇館跡

写真撮影：田口政典氏
写真提供：田口重久氏

作成年度：平成 23 年度

写真左上：昭和 54 年(1979 年) 偏奇館跡近景(永井荷風旧居跡) ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成 23 年(2011 年) 永井荷風旧居跡(六本木 1-6)

写真右下：昭和 54 年(1979 年) 突き当たり右が偏奇館跡 ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏



島崎藤村旧居跡〔麻布台 3-4-17〕

参照サイト： 建設省土木研究所データベース (<http://www.btr.go.jp/monocore/jp/100000/>)

2014年度調査結果レポート第1号 <http://www.kokoro-ai.com/kyokashu/kyokashu.html>



平成 22 年(2010 年)：
島崎藤村旧居跡



昭和 50 年(1975 年) : 写真撮影: 山口茂樹氏
写真提供: 山口茂樹氏

写真右下：昭和 50 年(1975 年) 島崎藤村旧居跡 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

麻布台周辺

麻布十番と周辺の山坂 鼠坂〔ねずみざか〕



昭和 59年(1984年) ;
鼠坂 坂下から



平成 24年(2012年)



昭和 50年(1975年) ; 鼠坂 坂下から



平成 24年(2012年)

狸穴公園の麓から麻布台に上
がる細い坂道。上部は榊米坂。
随(いたち)坂とつながっている。
江戸時代には狭く長い坂を
「鼠坂」と呼んだそう。文京区
世田谷や新宿区市ヶ谷にも同名
の坂がある。「鬼平犯科帳」の
「麻布一本坂」では、火付盗賊改
方の役人が刺客の浪人とこの
坂で刃を交える。小説でも、実
地と同様の崖沿いの細い坂道
として描かれているので、作者
の池波正太郎は、きっと、この
坂を実見したうえで書いたの
だろう。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 59 年(1984 年) 鼠坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左下：昭和 50 年(1975 年) 鼠坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

麻布台と周辺の山坂 三年坂〔さんねんざか〕



昭和 50 年 (1975 年) : 三年緩 緩上から



平成 25 年(2013 年)



昭和 50 年(1975 年)：三年坂 坂下から

坂の名前の由来は定かではない。江戸時代には無名の坂だった。まずこの坂があり、のちに石段になった模様。また、三年坂は別名「三念坂」などとも呼ばれ同じ名前坂がほかにも数箇所ある。



平成 26 年(2014 年)



参考文献: [1] 陈永发. 中国革命与无政府主义[M]. 台北: 联经出版事业公司, 1984: 100-101.

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 三年坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真左下：昭和 50 年(1975 年) 三年坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右下：平成26年(2014年)

麻布台周辺

麻布台と周辺の山坂 土器坂〔かわらげざか〕



昭和 50年(1975年)：土器坂 坂下から



平成 25年(2013年)



昭和 50年(1975年)：土器坂 坂上から



平成 25年(2013年)



昭和50年(1975年)
：土器坂 坂下から



平成25年(2013年)

このあたりに土器職人が住んでいたのが坂名となった。また、平安中期の武將源頼朝が、ここで買い求めた馬が河原毛で名馬だったからという説もある。
大正の作家で、三田文学を復活した水上瀧太郎は土器坂上ロシア大使館回りのお屋敷の子だった。「崖上から崖下の子供達を見つめる。一緒に遊びたいが気後れしている。熊野神社が子供達の遊び場所であった。」(『山の手の子』より)

麻布台周辺の歴史地図をダウンロードするには<http://www.city-mizuho-akiba.jp/>から
2014年4月に公開された「麻布台周辺の歴史地図」をダウンロードし、右の地図を印刷してください。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 土器坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真左中：昭和 50 年(1975 年) 土器坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 25 年(2013 年)

写真左下：昭和 50 年(1975 年) 土器坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 25 年(2013 年)



昭和59年(1984年):落合坂 坂標柱近景



平成25年(2013年)



昭和50年(1975年):落合坂 坂上から

我孫坊谷へ下る坂で、赤坂方面から往來する人が、行きあう位置にあるので、落合坂と呼んだ。位置に別の説もある。

参考資料: 港区産業観光ウェブサイトMINATOあらかると(<http://www.minato-aka.net/>)など
このパネルに掲載されている古い写真については、写真撮影:田口政典氏、写真提供:田口重久氏



平成25年(2013年)



作成年度:平成 25 年度

写真左上:昭和 59 年(1984 年) 落合坂 坂標柱近景 ◇写真撮影:田口政典氏/写真提供:田口重久氏

写真右上:平成 25 年(2013 年)

写真左下:昭和 50 年(1975 年) 落合坂 坂上から ◇写真撮影:田口政典氏/写真提供:田口重久氏

写真右下:平成 25 年(2013 年)



明治 40 年

麻布広尾の古川。川の流れるまち、昔の麻布は川岸の湿潤地帯であった。

出典：東京写真帖

平成 21 年

麻布には、古川の他に筭川（現在は暗渠）が流れている。天現寺橋付近で古川（渋谷川）に合流する筭川は、青山3丁目の梅窓院付近が水源の一つ、根津美術館にも水源を持っている。

左が筭川、右は昔からの道？
（西麻布2丁目付近）



平成 21 年

近くに川が流れ、昔は草原であった場所には、人々の道標ともなっていた庚申塔がたっている。

（西麻布2丁目、南青山4丁目）

作成年度：平成 21 年度

写真上：明治 40 年（1907 年）

◇写真提供：港区立港郷土資料館（出典：東京写真帖）

写真中：平成 21 年（2009 年）

写真下：平成 21 年（2009 年）



昭和 34 年：筭橋跡



昭和 46 年：筭橋跡



平成 23 年：外苑西通りから、牛坂方向。



「筭橋」



平成 23 年：筭橋跡



平成 23 年：交差点の場所が筭橋跡、その先が外苑西通りとの交差点。



平成 23 年：若葉会幼稚園横から筭橋跡、外苑西通り交差点方向。



平成 23 年：麻布霞町教会横から、筭橋跡方向。

筭橋跡（こうがい橋）

麻布一軒松岡様に、源経基にかかわる伝説を持っており、小さな橋ながら「江戸名所図会」にさし絵が残っている。西麻布付近から古川へ流れる筭川にかかっていた。現在、筭川は埋立になっているが、水道は、今でもマンホールの下を流れている。筭橋を渡り牛坂へと上って行く途中に、教会や私立幼稚園がある。近くには、この筭橋の名前のついた、筭小学校がある。筭（こうがい）とは、髪をかき上げるのに使った、箸（はし）に似た細長い道具、女性の髪（まげ）に簪（かんざし）に類して飾りとする道具もある。

作成年度：平成 23 年度

写真左上：昭和 34 年（1959 年） 筭橋跡 ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真右上：昭和 46 年（1971 年） 筭橋跡 ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真左中：平成 23 年（2011 年） 外苑西通りから、牛坂方面

写真中中：「筭橋」 ◇出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵

写真右中：平成 23 年（2011 年） 筭橋跡

写真左下：平成 23 年（2011 年） 交差点の場所が筭橋跡、その先が外苑西通りとの交差点

写真中下：平成 23 年（2011 年） 若葉会幼稚園横から筭橋跡、外苑西通り交差点方面

写真右下：平成 23 年（2011 年） 麻布霞町教会横から、筭橋跡方向

西麻布周辺

文人の足跡をたずねて（内藤鳴雪）



平成 24 年(2012 年)：内藤鳴雪居住跡 [西麻布 4-17-18]

伊予松山藩の藩士として、また教育行政官として働いた後、子規派俳句の重鎮となった内田鳴雪（1847-1926）は、71歳の時から没年の80歳まで南布野町に住んでいた。「ホトトギス」をはじめ、多くの雑誌、新聞の俳句漢者となり、明治の俳句革新運動に大きな功績を残した。当時、人口に歴史が「いちゃ」した句としては、「夕月や晴屋も誰も胸のかけ」が知られている。また、俳句在住当時の句としては、「迎へねど年は東にけり七十九」があり、居住の跡には港区教育委員会の墓内版が立っている。



昭和 54 年 (1979 年) :
内藤晴雪旧邸跡遠景

世界总部: 300 300 000 000
 中国总部: 300 300 000 000



平成 24 年(2012 年)：内藤晴雪居住跡



昭和 54 年(1979 年)：
内藤鳴雪旧跡遠景

与陈耀明、王世昌、陈海武、
与陈耀明、王世昌、陈海武、

資料サイト：「現代社会の人口データ」ホームページ、<http://www.city.tokyo.ac.jp/urban/>

「2017年度版知事レポート」 <https://www.mitsubishi-urban.co.jp/data/kyo/kyo-2017/kyo-2017.html>

作成年度：平成 24 年度

写真左上：平成 24 年(2012 年) 内藤鳴雪居住跡(西麻布 4-17-18)

写真右上：昭和 54 年(1979 年) 内藤鳴雪旧邸跡遠景

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左下：平成24年(2012年) 内藤鳴雪居住跡

写真右下：昭和 54 年(1979 年) 内藤鳴雪旧邸跡遠景

◇写真摄影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏



昭和59年(1984年):霞坂 標柱近景



平成26年(2014年)



平成25年(2013年)

明治初年に霞山稲荷(現在の稲田神社)から霞町の町名ができ、そこを貫通する道が明治20年代に開かれて霞坂と呼ばれた。

参考資料: 港区産業観光ウェブサイト「MINATOあらかると」(<http://www.minato-aka.net/>)など
このパネルに掲載されている古い写真については、写真撮影:田口政典氏、写真提供:田口重久氏



作成年度:平成 25 年度

写真左上:昭和 59 年(1984 年) 霞坂 標柱近景 ◇写真撮影:田口政典氏/写真提供:田口重久氏

写真右上:平成 26 年(2014 年)

写真左下:平成 25 年(2013 年)

西麻布周辺

西麻布と周辺の山坂 筭坂 [こうがいざか]



昭和50年(1975年):筭坂 坂下から



平成26年(2014年)



昭和50年(1975年):筭坂 坂上から

坂下を流れていた筭川の名からついた付近の地名によって、こう呼ばれるようになった。

参考資料:港区歴史観光ネットワークMINKATOあらかると(<http://www.minato-aka.net/>)など
このパネルに掲載されている古い写真については、写真撮影:田口政典氏、写真提供:田口重久氏



平成25年(2013年)



作成年度:平成 25 年度

写真左上:昭和 50 年(1975 年) 筭坂 坂下から

◇写真撮影:田口政典氏/写真提供:田口重久氏

写真右上:平成 26 年(2014 年)

写真左下:昭和 50 年(1975 年) 筭坂 坂上から

◇写真撮影:田口政典氏/写真提供:田口重久氏

写真右下:平成 25 年(2013 年)

西麻布と周辺の山坂 紺屋坂「こんやざか」



昭和 50年(1975年)：紺屋坂 坂下の景



平成 25年(2013年)



昭和 50年(1975年)
：紺屋坂 坂下から



平成 25年(2013年)

この坂付近に紺屋(染物屋)があったのでこう呼んだ。また江戸時代、坂のかけ下がごみ捨て場だったことからごみ坂ともいった。下ってゆくと井(こうがい)小学校の正門に出る。正門の前は五叉路になっていて、角に2000年ころまで「こうがい堂」という文具店があった。文具品ばかりでなく、「たけひこ」や「きびがら」のような工作に使う品物もあり、井小学校の生徒は、皆ここのお世帯になったものだ。



昭和 50年(1975年)
：紺屋坂 坂上を



平成 25年(2013年)



写真提供：田口政典氏より提供された写真。写真撮影：田口政典氏、写真提供：田口重久氏

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 紺屋坂 坂下の景 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真左中：昭和 50 年(1975 年) 紺屋坂 坂下から ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 25 年(2013 年)

写真左下：昭和 50 年(1975 年) 紺屋坂 坂上を ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 25 年(2013 年)

西麻布周辺

西麻布と周辺の山坂 牛坂〔うしざか〕



昭和 50年(1975年)：牛坂 坂下から



平成 25年(2013年)



昭和 50年(1975年)
：牛坂 坂下から



昭和 59年(1984年)
：牛坂 標柱近景



平成 25年(2013年)



平成 25年(2013年)

源経基（平安中期の武将）や白金長者（室町時代
に白根地区を開墾した柳下上経介）の伝説のある
井橋に続く古代の交通路で、牛車が往来したため
と想像される。

※本資料は、国史館東京分館蔵「江戸時代文書」より転写したもので、正確性を保証するものではありません。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 牛坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年(2013 年)

写真左中：昭和 50 年(1975 年) 牛坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真中央中：昭和 59 年(1984 年) 牛坂 標柱近景

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 25 年(2013 年)

写真左下：平成 25 年(2013 年)

西麻布と周辺の山坂 大横丁坂「おおよこちょうざか」



昭和 50年(1975年)：大横丁坂 坂上から



平成 25年(2013年)



昭和 50年(1975年)
：大横丁坂 坂下から



平成 25年(2013年)

江戸時代、この付近を俗に大横丁と読んでいたことからこの名が付いた。富士見坂ともよばれていた。

※本図は、江戸時代から昭和時代にかけての地図を基に、当時の地名や道路の状況を示しています。また、当時の地名や道路の状況を示しています。



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年（1975 年） 大横丁坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成 25 年（2013 年）

写真左下：昭和 50 年（1975 年） 大横丁坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右下：平成 25 年（2013 年）

西麻布周辺

西麻布と周辺の山坂 中坂〔なかざか〕



昭和 50年(1975年)：中坂 坂下から



昭和 50年(1975年)：中坂 坂上から



平成 25年(2013年)



平成 25年(2013年)

テレビ朝日通りを西へ下る坂道。紺屋坂と
北条坂の間にある坂。



本地図は、東京市役所より提供されたもので、正確性を保証するものではありません。また、本地図は、東京市役所の著作権により保護されています。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年（1975 年） 中坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 25 年（2013 年）

写真左中：昭和 50 年（1975 年） 中坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真左下：平成 25 年（2013 年）

麻布の階段・抜け道（西麻布）



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：六本木七丁目付近



平成25年(2013年)：六本木七丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布一丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布一丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布二丁目付近



平成25年(2013年)：六本木七丁目付近

作成年度：平成 25 年度

写真①：西麻布二丁目付近

写真②：西麻布一丁目付近

写真③：西麻布二丁目付近

写真④：西麻布二丁目付近

写真⑤：西麻布二丁目付近

写真⑥：六本木七丁目付近

写真⑦：西麻布一丁目付近

写真⑧：西麻布二丁目付近

写真⑨：六本木七丁目付近

写真⑩：西麻布二丁目付近

写真⑪：西麻布二丁目付近

写真⑫：西麻布二丁目付近

写真⑬：六本木七丁目付近

撮影年：平成 25 年(2013 年)

西麻布周辺

西麻布の山坂 堀田坂「ほったざか」



昭和49年(1974年)：堀田坂 坂上から



平成26年(2014年) 堀田坂 坂上から



昭和49年(1974年)：堀田坂 坂下から



昭和59年(1984年)：堀田坂 坂下から



平成26年(2014年)：堀田坂 坂下から



平成26年(2014年)：
堀田坂 標柱



堀田坂(ほったざか)

江戸時代には、大名堀田家の下屋敷に向かって登る道になっていた。昔から、渋谷駅～日赤医療センター間を結ぶバスが通っていた。元麻布の麻布学園の生徒が渋谷方面に帰る時は、堀田坂をぼやで登り、日赤医療センター前からこのバスを使う。近くの東京女子館の生徒と乗り合わせることをほめたに期待しつつ、坂を登る。

作成年度：平成26年度

写真左上：昭和49年(1974年) 堀田坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成26年(2014年) 堀田坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左中：昭和49年(1974年) 堀田坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真中中：昭和59年(1984年) 堀田坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右中：平成26年(2014年) 堀田坂 坂下から

写真下：平成26年(2014年) 堀田坂 標柱

麻布十番・元麻布周辺

氷川神社（元麻布 1 丁目）



昭和 6 年

出典：麻布鳥居坂警察署誌

創建は天慶 5 年とも文明年間ともいう、万治年間（1658～1661 年）に麻布一本松付近（現在地より 300m 程北）から現地へ移転した。



平成 21 年

現在は、すぐ後ろに元麻布タワーがそびえる。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 6 年（1931 年） ◇写真提供：港区立港郷土資料館（出典：麻布鳥居坂警察署誌）

写真下：平成 21 年度（2009 年）

麻布十番・元麻布周辺

がま池（元麻布 2 丁目）



昭和 34 年

がま池という名の由来には諸説あるが、大蝦蟇が棲んでいたというのは共通するところである。



平成 21 年

現在はマンションの一角に囲い込まれて、大半の面積を失っている。

作成年度：平成 21 年度

写真上：昭和 34 年(1959 年) ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真下：平成 21 年(2009 年)

麻布十番・元麻布周辺

江戸時代の観光名所 善福寺付近 江戸図絵から現代



戦災消失前の本堂

写真：港区立港郷土資料館蔵
寺の歴史：港区立港郷土資料館蔵



昭和 34 年：善福寺

写真提供：港区立港郷土資料館



平成 23 年：
現在の善福寺参道から大銀杏方向。

善福寺付近

麻布七不思議にも登場する鎌倉の巨木や、初のアメリカ公使館がおかれていた事でも知られる善福寺。「江戸名所図会」にも残る鎌倉の巨木は逆廻寺として現在も見ることが出来る。

善福寺右手の山の下には、第二次世界大戦末期、本土決戦用の地下壕が建設され、完成前に終戦となっている。その後、壕は埋め戻された。



平成 23 年：
この突き当たり奥に壕の入口の一つがあった。



「麻布善福寺」

写真：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館蔵

作成年度：平成 23 年度

写真左上：戦災消失前の本堂 ◇写真提供：港区立港郷土資料館(出典：港区の文化財 第 9 集)

写真右上：昭和 34 年(1959 年) 善福寺 ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真左中：平成 23 年(2011 年) 現在の善福寺参道から大銀杏方向

写真右中：平成 23 年(2011 年) この突き当たり奥に壕の入口の一つがあった

写真右下：「麻布善福寺」 ◇出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵

麻布十番・元麻布周辺

江戸時代の観光名所 一本松付近 江戸図絵から現代



昭和 34 年：一本松坂

写真提供：港区立港郷土資料館



『麻布一本松』

出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵



『麻布一本松』

一本松付近

麻布界隈同様、湧き井にまつわる伝説を持っており、江戸時代から明治にかけての絵が伝えられている。
麻布十番交差点から、有栖川宮記念公園方面に山を登った山頂付近に今も立っているが、松は結れるごとに代々植え継がれ現在に至っている。
この付近の旧地名、一本松町の由来となっていた。



(左)平成 23 年：大黒坂下から一本松方面。



(右)平成 23 年：今も賑わいを見せる大黒坂途中の大黒天。画面中央の高い所の車庫が傾斜地であることを示している。



『麻布一本松の図』

出典：『新撰東京名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵



平成 23 年：代々植え継がれてきた松の木。

作成年度：平成 23 年度

写真左上：昭和 34 年(1959 年) 一本松 ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真右上：『麻布一本松』 ◇出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵

写真左中：『麻布一本松』 ◇出典：『江戸の華名勝會 麻布』 東京都立中央図書館新収文庫和書所蔵

写真中中：平成 23 年(2011 年) 今も賑わいと見せる大黒坂途中の大黒天。画面中央の高い所の車庫が傾斜地であることを示している

写真中下：『麻布一本松の図』 ◇出典：『新撰東京名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵

写真右下：平成 23 年(2011 年) 代々植え継がれてきた松の木

麻布十番・元麻布周辺

麻布十番と周辺の山坂 暗闇坂「くらやみざか」



昭和 50年(1975年)：暗闇坂 坂上から



平成 24年(2012年)

旧麻布宮下町(現麻布十番一丁目)から旧一本松町(現在の元麻布三丁目と一丁目)へと上る坂道。明治 35年に刊行された『風俗図報 臨時増刊 新編東京名所図会 麻布区之部』でも紹介されている。
『江戸切絵図』(1861年改正)には「クラヤミ坂」と書かれており、坂上右側にはオーストリア大使館がある。左側は高い崖がつづき、坂道に樹木がおおいにふさぎ、非常に暗い感じがした。
戦後しばらくはことにさびしく、通則や商業が出没するため、夜など、とても女性や子どもの通れる道ではなかったと言われている。平成 24年(2012年)に左側の建物が一部解体されたことから、空が広くなった。



昭和 50年(1975年)：
暗闇坂 坂下から



平成 24年(2012年)



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 暗闇坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左下：昭和 50 年(1975 年) 暗闇坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 24 年(2012 年)

麻布十番・元麻布周辺

麻布十番と周辺の山坂 七面坂〔しちめんざか〕



昭和 50年(1975年)：七面坂 坂下から



平成 24年(2012年)

麻布十番二丁目七番と八番の間にある短い坂道。

戦前まで、坂の東側には本善寺があり、七面天女の本像が安置されていた。現在、本善寺は品川区東五反田三丁目六番一号にある。本善寺は1608年の創立で、七面天女は「麻布十番の七面天」と呼ばれ、毎月、1日と9日の縁日には、たいへんな賑わいを見せたといえられている。



昭和 59年(1984年)：
七面坂 坂上から



平成 24年(2012年)



この写真は、昭和50年(1975年)と平成24年(2012年)の比較写真です。写真の左側は、昭和50年(1975年)の撮影写真、右側は平成24年(2012年)の撮影写真です。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 50 年(1975 年) 七面坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左下：昭和 59 年(1984 年) 七面坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 24 年(2012 年)

麻布十番・元麻布周辺

麻布十番と周辺の山坂 仙台坂上〔せんだいざかうえ〕



昭和 49年(1974年)：仙台坂 坂上から



平成 24年(2012年)



昭和 54年(1979年)：仙台坂 坂上から



平成 24年(2012年)

元麻布一丁目、三丁目と南麻布一丁目の間を東から西へと
上る長い坂。
特に坂上近くの傾斜が激しく、麻布十番に一時住んでいた
北原白秋は、「仙台坂 石の道を ひきわびて 馬倒れたり
覆れけらし」と詠んでいる。
かつては坂上に商店街があり賑わっていたが、今はほとん
ど残っていない。



写真撮影：桜井昭一氏

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 49 年(1974 年) 仙台坂 坂上から ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左下：昭和 54 年(1979 年) 仙台坂 坂上から ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真右下：平成 24 年(2012 年)

麻布十番・元麻布周辺

麻布十番と周辺の山坂（麻布十番商店街）



昭和 48年(1973年)



平成 24年(2012年)

『半七捕り物帳』などで有名な作家・岡本綺堂は関東大震災で焼き出され、その年の年末、知人の紹介で麻布十番に仮住まいしていた。「家の裏は崖であり庭も崖の裾の草達が押し寄せており何が暮らしている。しかし家があるだけ幸せというものだ。年末の麻布十番の通りには多い人出で下はぬかるんでおり下手すると転んでしまう。」などと記している(『十番雑記』1924年)。商店街は大震災時の延焼をまぬがれたことから外部からの流入も多く、その後、賑わったという。第二次世界大戦時の空襲で一帯は瓦礫と化した。戦後、地元の人びとの努力によって復旧し、現在に至っている。



昭和 48年(1973年)



昭和 42年(1967年)



平成 24年(2012年)



【写真上段及び中段左】については写真提供：桜井昭一氏、【写真中段右】については写真撮影：田口政典氏、写真提供：田口重久氏

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 48 年(1973 年) ◇写真提供：桜井昭一氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左中：昭和 48 年(1973 年) ◇写真提供：桜井昭一氏

写真右中：昭和 42 年(1967 年) ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左下：平成 24 年(2012 年)

麻布十番・元麻布周辺

麻布の交通「麻布十番付近」



昭和 42年(1967年)：二の橋交差点付近
二の橋交差点付近より、麻布十番方面を望む。



平成 24年(2012年)



昭和 42年(1967年)：新一の橋交差点付近
一の橋交差点付近から、新一の橋方面を望む。
建設中の首都高速道路「一ノ橋ジャンクション」。



平成 24年(2012年)



平成 24年(2012年)：一の橋交差点付近(3点とも)



作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 42 年(1967 年) 二の橋交差点付近 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左中：昭和 42 年(1967 年) 新一の橋交差点付近 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 24 年(2012 年)

写真下(3 点とも)：平成 24 年(2012 年) 一の橋交差点付近

天現寺橋交差点は、青山方面から南下してきた筭川が渋谷川に合流し、古川と名を変える起点である。天現寺橋は、現在は暗渠となった筭川にも架かる橋であった。



昭和 40 年頃

写真提供：南麻布 4 丁目 豊田幸雄氏

広尾病院の屋上から天現寺橋交差点を望む。都電 34 番が明治通りを走っている。
大正時代には交差点の北西角に都電広尾車庫が開設され、都電の要所となっていた。



平成 21 年

明治通りと外苑西通りが交差し、首都高速の天現寺口があり、今も交通の要所となっている。

作成年度：平成 21 年度

写真左上：昭和 40 年(1965 年)頃 ◇写真提供：南麻布 4 丁目 豊田幸雄氏

写真下：平成 21 年(2009 年)



昭和 34 年：四之橋

江戸時代には、麻布と高輪を結ぶ街道沿いにかかる橋であった。
橋の西北角に土蔵番・土土屋相模守の下屋敷があったことから、当時は相模殿橋と呼ばれることもあった。
(*現在の茨城県土浦市一帯)



「広尾ふる川」
『名所江戸百景』
初代・歌川広重作
(改印＝安政 3 年 7 月)
広尾之原(現在の都立広尾病院
一帯)を背景に、吉川にかかる
四之橋が描かれている。



(右上)平成 22 年：現在の四之橋

(右下)平成 22 年：

欄干に設けられた由来書き

作成年度：平成 22 年度

写真上：昭和 34 年(1959 年) ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真左下：「広尾ふる川」 ◇出典：『名所江戸百景』 初代・歌川広重作(改印＝安政 3 年 7 月)

写真右下上：平成 22 年(2010 年) 現在の四之橋

写真右下下：平成 22 年(2010 年) 欄干に設けられた由来書き

南麻布周辺

江戸時代の観光名所 広尾付近 江戸図絵から現代



平成 5 年：広尾駅入口遠景

弘尾駅入口遠景



平成 24 年：広尾駅入口遠景



「弘尾毘沙門堂(廣尾毘沙門堂)」

弘尾毘沙門堂(廣尾毘沙門堂)



平成 21 年：弘尾橋交差点の横断歩道から天現寺橋交差点方向。



平成 21 年：西洋人が多く集まるオープンカフェ



平成 21 年：弘尾神社



「弘尾原(廣尾原)」

弘尾原(廣尾原)

広尾付近

「江戸名所図会」をみると、毘沙門堂の向こうに広大な野原と古川、葬川の流れる田園風景が広がっている。現在の東京メトロ広尾駅付近を流れる葬川の縮減が港区と渋谷区の境目となっている。

作成年度：平成 23 年度

写真左上：平成 5 年(1993 年) 弘尾駅入口遠景 ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成 24 年(2012 年) 弘尾駅入口遠景

写真左中：「弘尾毘沙門堂(廣尾毘沙門堂)」 ◇出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館所蔵

写真右中：平成 21 年(2009 年) 弘尾橋交差点の横断歩道から天現寺橋交差点方向

写真左下：平成 21 年(2009 年) 外国人が多く集まるオープンカフェ

写真中下：平成 21 年 (2009 年) 弘尾神社

写真右下：「弘尾原(廣尾原)」 ◇出典：『江戸名所図会』 港区立港郷土資料館

麻布の交通「古川橋付近」



昭和 44年(1969年)：古川橋交差点

古川橋交差点より明治通り、天現寺橋交差点方面を望む。



平成 24年(2012年)



昭和 44年(1969年)：桜田通り



平成 24年(2012年)

古川橋交差点より、麻布十番方面を望む。新旧写真を比較すると、通り沿いの緑化並木の成長ぶりがうかがえる。



昭和 42年(1967年)：古川橋交差点

昭和42年当時の麻布十番交差点の様子。当時の麻布十番交差点は、古川橋交差点の南側にあった。



平成 24年(2012年)

古川橋交差点より白金高輪駅方面を望む。白金高輪に向かう国道一号線はこの後に作られた。新築の線路ある道は魚沼方面に続いていた。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 44 年(1969 年) 古川橋交差点 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 24 年(2012 年)

写真左中：昭和 44 年(1969 年) 桜田通り ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右中：平成 24 年(2012 年)

写真左下：昭和 42 年(1967 年) 古川橋交差点 ◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右下：平成 24 年(2012 年)

南麻布周辺

都電が走っていた頃（二之橋付近）



昭和42年(1967年)



平成25年(2013年)



昭和44年(1969年)



平成25年(2013年)



昭和44年(1969年)



昭和43年(1968年)



昭和44年(1969年)



昭和42年(1967年)



このパネルに掲載されている古い写真は、写真提供：河村かずふさ氏

作成年度：平成 25 年度

このパネルに掲載されている古い写真 ◇写真提供：河村かずふさ氏



昭和 59年(1984年):北条坂 坂上から



平成 26年(2014年) 北条坂 坂上から



昭和50年(1975年):北条坂 坂下から



平成26年(2014年):北条坂 坂下から



平成26年(2014年):
北条坂より鉄砲坂を望む



平成26年(2014年):北条坂 標柱



北条坂(ほうじょうざか)

坂下近く南側に大名北条家の下屋敷があったためにこの名がついた。
三田方面から二之橋、仙石坂を登り、この北条坂を降りるのが青山方面へ行く街道であり、交通量が多い道。
坂の下部分を鉄砲坂とも言う。

この情報は、国土地理院「デジタル地形図」(2014年)より作成された。

作成年度：平成 26 年度

写真左上：昭和 59 年(1984 年) 北条坂 坂上から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真右上：平成 26 年(2014 年) 北条坂 坂上から

写真左中：昭和 50 年(1975 年) 北条坂 坂下から

◇写真撮影：田口政典 氏 / 写真提供：田口重久 氏

写真中中：平成 26 年(2014 年) 北条坂 坂下から

写真右中：平成 26 年(2014 年) 北条坂より鉄砲坂を望む

写真下：平成 26 年(2014 年) 北条坂 標柱

南麻布周辺

南麻布の山坂 奴坂・薬園坂・釣堀坂



昭和50年(1975年)：薬園坂 坂上から



昭和50年(1975年)：釣堀坂西から東を望む



昭和50年(1975年)：薬園坂から下る



昭和50年(1975年)：奴坂 坂下から



奴坂(やつこざか)

仙台上から南へ本村保育園を通り過ぎて行くと、右手に小さな公園がある。そこから右に下る坂が奴坂である。名前の由来はこの場所の古い名前、竹が谷の小屋で「谷小坂」、薬王坂のなまりで「やつこう坂」、「奴が付近に多く住んでいた坂」の三説がある。奴坂を下るとまた坂を登ることになり、その先に本村幼稚園と本村小学校がある。昔は奴坂の上の道の向かいに駄馬子屋があった。文房具や用具も売っていた。銀玉拳銃と銀玉を買った記憶がある。

薬園坂(やくえんざか)

麻布の台地から南東に下り、古川の四之橋に達する坂。江戸時代前期にこの辺りに幕府の御薬園があったためこう呼ばれた。薬園は徳川綱吉の頃、白金御殿の拡張のため廃止され、小石川御薬園に移されたという。この付近は東から南に面しているので日当たりが良く、薬草にも適していたのだろう。麻布台地の麓南端が薬園坂上と言えよう。一帯は今も静かでのんびりした感じであり、鳥の音が大きい。

釣堀坂(つりぼりざか)

薬園坂を下り始めて程なく右に小路がある。最初の道は行き止まり、二つ目が釣堀坂だ。坂は向かいで上りになり、本村小学校へと繋がっていく。付近に釣り堀が2つあったらしいが、今は1つしかない。私の記憶では、昭和30年頃は坂下の横に小さな目角い池があり、春にはオタマジャクシが大量に湧いていた。何匹かいただいて家に持ち帰った思い出がある。当時は、薬園坂から入って左側が石道だったので、坂を登り下りせず、この上をつたって学校に行こうとしたが、かえって時間がかかってしまった。

作成年度：平成26年度

写真左上：昭和50年(1975年) 薬園坂 坂上から ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：昭和50年(1975年) 釣堀坂 西から東を望む ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真左下：昭和50年(1975年) 薬園坂から下る ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右下：昭和50年(1975年) 奴坂 坂下から ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏



昭和20年代後半：赤羽橋交差点付近



昭和30年代初期：海岸1丁目より



昭和34年：中之橋付近



昭和30年頃：赤羽橋交差点



昭和30年代初期：増上寺より



昭和30年頃：飯倉公園（東麻布1丁目）



昭和30年頃：東麻布1丁目



昭和30年代初期：増上寺より



昭和17年：出征を控えた兵士。善福寺にて



昭和57年：十番会館付近（麻布十番2丁目）



昭和43年：一之橋電停留所



昭和43年：一之橋電停留所



昭和34年：麻布十番4丁目付近



現在の東麻布～麻布十番



昭和34年：十番稲荷神社（麻布十番1丁目）

作成年度：平成22年度

写真①、②、④、⑤、⑥、⑦：東麻布周辺の古い写真 ◇写真提供：相田清隆氏

写真③、⑨、⑩、⑪、⑫：麻布十番、東麻布周辺の古い写真 ◇写真提供：港区立港郷土資料館

写真⑧：出征を控えた兵士。善福寺にて ◇写真提供：善光寺 桜井慧雄氏



昭和 52年(1977年)：旧麻布谷町(六本木三丁目付近)



昭和 50年(1975年)：仙台坂上



昭和 49年(1974年)：
旧麻布消防署(南麻布五丁目付近)



昭和 52年(1977年)：
六本木一丁目付近



昭和 52年(1977年)：
二の橋バス停付近



昭和 43年頃(1968年頃)：天現寺橋交差点



昭和 43年頃(1968年頃)：天現寺橋交差点

作成年度：平成 25 年度

写真左上：昭和 52 年(1977 年) 旧麻布谷町(六本木三丁目付近) ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真右上：昭和 50 年(1975 年) 仙台坂上 ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真左中：昭和 49 年(1974 年) 旧麻布消防署(南麻布五丁目付近) ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真中中：昭和 52 年(1977 年) 六本木一丁目付近 ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真右中：昭和 52 年(1977 年) 二の橋バス停付近 ◇写真提供：桜井昭一 氏

写真左下：昭和 43 年(1968 年)頃 天現寺橋交差点 ◇写真提供：豊田幸雄 氏

写真右下：昭和 43 年(1968 年)頃 天現寺橋交差点 ◇写真提供：豊田幸雄 氏

古い麻布



昭和40年頃(1965年頃):飯倉片町付近



昭和40年頃(1965年頃):飯倉片町付近



昭和42年(1967年):飯倉交差点付近



昭和40年頃(1965年頃):飯倉片町付近



昭和42年(1967年):飯倉交差点付近



昭和40年頃(1965年頃):飯倉片町付近



昭和32年頃(1957年頃):ツインーの橋 建築前航空写真



昭和42年(1967年):飯倉交差点付近



昭和40年頃(1965年頃):飯倉片町付近



昭和32年頃(1957年頃):ツインーの橋 建築前航空写真



麻布西野園(麻布西野園)



昭和40年頃(1965年頃):飯倉片町付近



昭和39年頃(1964年頃):港区役所南側官舎にて



麻布西野園

このページに掲載されている古い写真は、飯倉片町付近(写真提供:渡邊 稔子氏)、ツインーの橋(航空写真提供:早川 一夫氏、写真撮影:佐藤 翠陽氏)、麻布支所前集合写真(写真提供:齋藤 富士郎氏)、飯倉交差点付近(写真提供:河村 かずふさ氏)、東麻布商店街(写真提供:麻布西野園)。

作成年度：平成 26 年度

このページに掲載されている古い写真

飯倉片町付近 ◇写真提供：渡邊 稔子氏

ツインーの橋航空写真 ◇写真提供：早川 一夫氏、写真撮影：佐藤 翠陽氏

麻布支所前集合写真 ◇写真提供：齋藤 富士郎氏

飯倉交差点付近 ◇写真提供：河村 かずふさ氏

東麻布商店街 ◇写真提供：麻布西野園



明治36年(1903年)：麻布小学校(尋常高等小学校時代)



筭小学校『筭小学校五十年史』(昭和34年刊)より



明治39年頃(1876年頃)：南山学校



明治36年(1903年)：麻布小学校(尋常高等小学校時代)



筭小学校旧校舎入り口
(昭和38年刊「西園地アルム」より)



明治28年頃(1895年頃)：南山尋常高等小学校



昭和4年(1929年)：麻布小学校(昭和4年度運動会)



昭和初期：南山尋常小学校



昭和30年代(1975～1984年)：麻布小学校旧校舎



筭小学校旧校舎(大正14年(1925年)建築)



昭和初期：当時の運動会



昭和60年(1985年)：麻布小学校旧校舎完成



『筭小学校五十年史』(昭和34年刊)より



平成5年(1994年)：南山小学校120周年

(昭和36年刊「西園地アルム」より)／昭和38年刊「西園地アルム」より／昭和38年刊「西園地アルム」より／昭和38年刊「西園地アルム」より／昭和38年刊「西園地アルム」より

作成年度：平成 26 年度

このページに掲載されている古い写真

麻布小学校 ◇写真提供：港区立麻布小学校

筭小学校 ◇写真提供：港区立筭小学校（出典：『筭小学校五十年史』等）

南山小学校 ◇写真提供：港区立南山小学校（出典：『南山小学校開校 120 周年記念』）

懐かしい写真（東洋英和女学院）



昭和19年(1944年)：鳥居坂下のまち並みと丘の上の東洋英和女学院



大正3年(1914年)：館内時の図書



明治から大正時代：麻布教会(鳥居坂教会の前身)



昭和19年頃(1944年頃)：六本木五丁目付近



昭和10年代頃：東洋英和女学院付近の空撮



明治から昭和前期：外国人留学生住宅と給糧庫



昭和19年(1944年)：六本木五丁目付近

この1本は、昭和19年(1944年)に撮影されたもので、当時の空撮写真として貴重な資料とされています。



昭和13年(1938年)：東洋英和女学院(現在地)に完成した校舎



昭和11年(1936年)：震災の石碑

作成年度：平成 26 年度

このページに掲載されている古い写真

◇写真提供：東洋英和女学院

歴史や文化

お江（江姫） 麻布ゆかりの江戸将軍家の女性

お江と麻布地区

港区を代表する名刹・増上寺は江戸時代に徳川家の菩提寺として発展しました。家康の三男で後に第二代将軍となる秀忠に嫁いだ「お江」も、夫君と共に増上寺の徳川家墓所に眠っています。
お江が55年の生涯に幕を下ろしたのは寛永3年(1626年)9月15日。亡骸は増上寺から麻布野に設けられた斎庭所に移され、火葬されました。
麻布地区には、葬列が通ったと言われる我善坊谷、葬儀に尽力した寺院など、お江ゆかりの地とされる場所や史跡が点在しています。

六本木にひっそりと息づく、お江ゆかりの寺院

寛永6年(1629年)、お江の葬儀と三回忌に尽力した教善寺・深廣寺・光善寺・正信寺に寺地が与えられた(正信寺は平成10年に他区へ移転)。



※上記の寺院については、深廣寺以外も麻布地区にあり、お江ゆかりの地とされています。



窪地に設けられた六本木墓苑

戦後の道路拡張に伴い、教善寺・深廣寺・光善寺・正信寺・康順寺(いずれも浄土宗)の墓苑を窪地の跡地に集約。共同墓地とした。



二の丸公園から見た六本木墓苑の様子(左から右へ)：「増上寺徳川家墓所」・「教善寺」・「深廣寺」・「光善寺」・「正信寺」・「康順寺」・「六本木墓苑」



徳川でとらえた我善坊谷一帯

地形図(下図参照)で確かめると、一帯が東西に伸びたU字型の窪地になっていることがわかる。



緑(濃い色)の部分が高地となっている。



作成年度：平成22年度

写真(このパネルに掲載されている全ての写真)：平成23年(2011年)1月16日(日曜日)まち歩き・撮影による

■参考資料：『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』(東京大学出版会)、『港区お江マップ』(港区観光協会・港区産業振興課)等

「麻布七不思議」 - 江戸と今 (1)



平成 23年(2011年)：麻布地区総合支所の地下1階にある、江戸時代の「麻布七不思議」を題材にした壁面のレリーフ。「柳の井戸」「狸穴の古洞」「広尾の送り堀子」「善福寺の逆さ観音」「墓池」「長坂の脚氣石」「一本松」を七つの不思議としてあげている。

◆このほか、かつて「麻布七不思議」に数えられた主なもの
東町の霞石、六本木、狸穴の婚礼、大黒坂の扇殺、我善坊の大鐘、古川の狸懸渡、谷町の遊女屋敷、二本松の赤子、白金御殿の一本足、釜なし焼丁、化棒、化狸杓、秋月の羽衣



平成 24年(2012年)：かつて洞穴があったと伝えられる狸穴坂下の谷合。写真は、ちょうどそのあたりにある「狸穴公園」。

狸穴という地名はその昔、狸穴坂に狸穴が横む大きな穴があったため、銅を掘り出した「まぶ穴」(坑道の穴)があったため、など諸説ある。



平成 22年(2010年)：善福寺の参道にある「柳の井戸」。

弘法大師が常陸の鹿島明神に祈願し、手にしていた錫杖を地面に突き立てたところ、湧水が湧き出したとの言い伝えがある。



平成 24年(2012年)



平成 23年(2011年)：大黒坂から見た「一本松」。

天保2年(1831年頃)、平将門を打ち倒した源経基がこの地にきて宿をとった。去るとき、冠装束をこの松にかけていったことから、「冠の松」と呼ばれるようになったとの言い伝えがある。

江戸時代、本所七不思議、番町七不思議などと並んで有名だったといわれる「麻布七不思議」。奇談や言い伝えなど、七不思議に数えられるものは当代の人びとの興味関心によってばらつきがあり、江戸、明治、大正、昭和とさまざまな七不思議が残されている。ここでは、江戸時代に人びとから注目された「不思議」のうち、麻布地区総合支所地下1階にあるレリーフ、「麻布の七不思議」で取り上げている場所や事物に焦点をあて、それぞれの今の表情を紹介する。

写真左端：『東京都江戸東京博物館研究報告 - 第5号』(東京都江戸東京博物館)、『江戸東京伝説散歩』(青蛙房)等

作成年度：平成 24 年度

写真左上：平成 23 年(2011 年) 麻布地区総合支所の地下1階にある、江戸時代の「麻布七不思議」を題材にした壁面のレリーフ。

写真右上(上)：平成 22 年(2010 年) 善福寺の参道にある「柳の井戸」

写真右上(下)：平成 24 年(2012 年)

写真左下：平成 24 年(2012 年) 狸穴公園

写真右下：平成 23 年(2011 年) 大黒坂から見た「一本松」

■参考文献：『東京都江戸東京博物館研究報告 - 第5号』(東京都江戸東京博物館)、『江戸東京伝説散歩』(青蛙房)等



平成 23年(2011年)：善福寺の「逆さ銀杏」。
根がせり上がり、枝先が地面に向かって伸びていることからこの名がある。観望聖人が地面に刺した杖から繁茂したともいわれ、「杖屋舎」の別名も。



平成 23年(2011年)：「脚気石」があったとされる場所。
その石に塩をかけて痒むと足(脚)の病が治るというところから、脚気石と呼ばれるようになったという。



平成 24年(2012年)：藪の向こうに垣間見える「がま池」。

江戸時代。この池は旗本・山崎治正の屋敷の敷地内にある大きな池であった。近隣で火事が起こったとき、池の直である大蔵が口から水を吹きかけて鎮火を助け、山崎家の屋敷を守ったという伝説がある。池は昭和初期に埋め立てられ、現在はマンションの敷地内に一部が残っている。



平成 22年(2010年)：「広尾の送り囃子」の舞台となった広尾が原は、今の広尾から南麻布周辺にかけての一带といわれる。

その昔、夜中にそのあたりを通ると、どこからともなくお囃子の音が……。はて、こんな夜更けに？ と耳を澄ますと音はすぐ近くで聞こえ、いったいだれが？ と身構えようと、今度はどんどん遠ざかっていったとか、狸のいたずらという説も。

写真左下：『東京江戸東京博物館研究報告 - 第5号』(東京都江戸東京博物館)、『江戸東京伝説散歩』(青蛙房)等

Copyright © 2011

作成年度：平成 24 年度

写真左上：平成 23 年(2011 年) 善福寺の逆さ銀杏

写真右上：平成 24 年(2012 年) 藪の向こうに垣間見える「がま池」

写真左下：平成 23 年(2011 年) 「脚気石」があったとされる場所

写真右下：平成 22 年(2010 年) 「広尾の送り囃子」の舞台となった広尾が原は、今の広尾から南麻布周辺にかけての一带といわれる

■参考文献：『東京都江戸東京博物館研究報告 - 第 5 号』(東京都江戸東京博物館)、『江戸東京伝説散歩』(青蛙房)等

移築されて今も残る建物（麻布区役所・三井邸）



明治後期～昭和初期：麻布区役所 資料：港区議会史（通史編）



平成26年（2014年）：六本木三丁目付近

明治、大正時代の麻布区役所は、現在の港区六本木三丁目に建っていた。

この建物は明治42年（1909年）に建てられた。その後、昭和10年（1935年）に、区役所を六本木五丁目（現麻布地区総合支所が建っている場所）に移すことになり、麻布区役所は新たに建てられた。

三丁目に残された木造の旧庁舎は、日本獣医生命科学大学（旧日本獣医畜産大学）が買い取り、武蔵境駅前の同大学本館として今も使われている。

つまり105年を経てまだ現役の建物である。玄関のポーチベランダ部分が、円形から四角形へ、また全体にシンプルな感じになったが、シルエットに変化はなく、当初の形を残した貴重な建築といえる。



平成25年（2013年）：日本獣医生命科学大学



平成25年（2013年）：三井八郎右衛門邸



平成25年（2013年）：西麻布三丁目付近

西麻布三丁目、テレ朝通りから麻布税務署の角を外苑西通り方面に入ると、集合住宅のまわりをぐるっと一周する道が現れる。現在は集合住宅になっている場所には、昭和27年（1952年）に三井第11代総領家当主・三井八郎右衛門邸があった。各地の三井家関連施設を部分的に移すことで構成された建物は、現在「江戸東京たてもの園」に移築・復元され、三井財閥繁栄の面影を知ることができる貴重な文化財として大切に保存されている。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：明治後期～昭和初期 麻布区役所 ◇出典：港区議会史（通史編）

写真右上：平成 26 年（2014 年） 六本木三丁目付近

写真左中：平成 25 年（2013 年） 日本獣医生命科学大学

写真左下：平成 25 年（2013 年） 三井八郎右衛門邸

写真右下：平成 25 年（2013 年） 西麻布三丁目付近



平成 26年(2014年)

「おかめ団子」跡、間口3間(約5m45cm)、奥行き11間(約20m)の縦2階という店は、いつも客であふれていたと、当時の繁盛ぶりが伝えられている。



平成 26年(2014年)

団子屋こそないが、跡地周辺には10年、20年と“古い”をしている飲食店が少なくない。



昭和 39年(1964年)

：六本木五丁目付近(写真左端が飯倉片町)

古典落語には、麻布界隈が舞台として登場する場がいくつかある。江戸時代から明治時代まで飯倉片町に実在した団子屋が舞台の「おかめ団子」「井戸の茶碗」に登場する正倉者のくず屋の道具街は、麻布谷町の住人として描かれている。これら二つの人情脈を通して、江戸からつく麻布の歴史と今を訪ね歩いてみた。

参考資料『麻布区史』、『続あらすじで読む古典落語の名作』（楽書館）



おかめ団子(あらすじ)

最後光助の「おかめ団子」は、一人旅のおかめが嵐の上、愛憎があるとして、たいそう愛憎していた。

ある夜の寒い日、そのおかめ団子が早稲の町にまいりして来たところ、貧乏な身なりが一段の団子を求めて店にやってきた。番頭は悪い奴やとすると、客と知った店の主は腹を割き、その貧乏な身なりの大根。太助は団子を売る舞い、さらには太助が毎日母親のために買っているという、ええとして一泊み込んだ。

家に帰った太助は、母親に団子を売ってやらせながら、悪い有難いせいで体を腐らせている母にどうにかお返しに団子を売りたいと思った。先だっておかめ団子で団子を売って見たいというお前の有り難いお返し、母がいなくなつてからは難事はできないと、そのおかめ団子に逃げ込むべく難儀を申し立てた。

途中、大に遅れたりしながらも、おかめ団子の店に入り、「さぞどうしようか」と思ったところ、その時、番頭がずっと聞き、おかめが店へ出てきた。そして、縁側からお返しを返し、お返しに番頭を助けてくれると申し立てたのを、太助は夢中で助けた。

無事に助けた太助は、おかめはいいやがっていたのだった。その様子に気づいた太助は助けに入っていた太助に難儀を聞いていたが、ふと太助がここにいるのか平気で悪い事をして聞いたところ、太助は母に団子を売りたいがために盗みに入つた店頭に話した。太助はその難事よりと正直さに感心しお返しを渡して帰した。

その後、おかめは太助と一緒に住むことになる。だし、太助は団子屋の番頭となり、おかめ、母親ともども幸せに暮らした。これは愛憎したという。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：平成 26 年(2014 年)

写真右上：平成 26 年(2014 年)

写真左下：昭和 39 年(1964 年) 六本木五丁目付近(写真左端が飯倉片町) ◇写真提供：東洋英和女学院

■参考資料：『麻布区史』、『続あらすじで読む古典落語の名作』（楽書館）

麻布と落語（井戸の茶碗）



平成23年(2011年)

奥ガーデン上層階から、くず屋の漬兵衛が住んでいたとされる旧麻布谷町の方角を望む。住居表示はなくなったが、首都高速3号渋谷線と都心環状線の合流地点、「谷町ジャンクション」(写真中央)の名に残されている。



昭和52年(1977年)

旧麻布谷町の商店街。道路の左側が六本木1丁目1番、右が1丁目3番、上方の建物はスペイン大使館と思われる。



昭和48年(1973年)

旧麻布區館町北西りの高台から旧麻布谷町を望む。上方に当時の聖南坂教会が見える。



田原布谷町は、現在の六本木1・2丁目と赤坂2丁目の一部にあたる。町名が廃止されたのは昭和42年(1967年)。昔ながらの家屋が建ち並ぶ町は首都高速で分割され、大型複合施設や高層ビルの建設が相次ぐことで、様相は一変した。

井戸の事情(あふすじ)

徳和院に往く正徳帝のくすねの漢表が自由の漢正宮(寛永宮)の前を歩いて、金持は相模から、正宮が品物を盗むに、城に呼ばれた。城について正徳院に入ると、父親の友人、千代田高から私物を二両で買ってくれないかと頼まれる。もし買ったら城は静かというので私物を引き取った漢表は、私物を賣に入れ、三郎の御用所へお参りして、城を通過する。城が閉じられ、民に呼び止められ、漢表は私物を三両で買った。

保たれた様を武士がめぐる真道に連れて歩いて
いる。お道の下にあたる鉢がはかされて小判
十両が分出た。驚いた武士は再び手に涙をう
ち、仏像を買ったはずだ、と泣き、真道面
を問う。武士は、「願ひ家の御本尊久延聖門」と
告げる。「仏像を買ったが小判を買ったお母さん味
ない」と。真道面に五十両を託し手渡のものに驚
かせた。

ところが、「買った仏像が何故か返ろうと。それはもう自分のものではない」とと首も揺るまい。見かねた良縁の大家が、其末とト首とで二十両。残りの中へ通良縁にこの村費を出すが、ト首は納得しない。「お金を受け取るかわり、先方になにが品物を貰い上げているかどうかの大家のすすまひ。ト首はいくらも使っている父の粗悪の御座を善法に渡し、ようやく二十両を受け取った。

この説話が家や中へ評判になり、陸田家の親類が再婚を薦めたいという。目利きの家では「井戸の三郎」という名前であることがわかり、親類が三郎と賞い上げた。おかげで三郎はまたもやトコと高木の間をむかひた。三郎は、お母に申しあげ、結婚のむかひなら賞を受けぬ」という条件でよくとトコは取り合ふ。三郎は自分の条件を述べると、高木も三郎の結婚を承認。よい話です。親類は三郎になりきらず、もう一度よく話をし、また三郎がくることをうけいねい。

参考文献「古地図と名所図会について」江戸の地図「吉森出版社」等
町田と岩野の町史提供「堀井隆一」

作成年度：平成 25 年度

写真左上：平成23年(2011年)

写真左下：昭和 52 年(1977 年) 旧麻布谷町の商店街 ◇写真提供：桜井昭一氏

写真右下：昭和 48 年(1973 年) 旧麻布筆筈町北寄り高台より旧麻布谷町を望む ◇写真提供：桜井昭一氏

■参考資料：『古地図と名所図会で味わう江戸の落語』（青春出版社）等



趙江靖 著 下卷 上海遠東出版社

康応2年(1154年)、国の重要に貴顕寺(寺・神社)に引き上げられ、初代和同・絶江が名僧で付随の地蔵となり、地名に変わった。



第26卷(2014期)：
缺注版 留下台台版上重留位

『黄金樹(に呼ばれる)』 海老原正

下谷の山崎町 〆に西宮という街さんがいた。真逆風流に溢み、一州豊満を食
育たれていたが、風邪がもとで急に寝つき、そこへ病に侵んでいた金山
草堂 〆の金月庵から出して見物し〆にやってくる。

何かに食べたいものはないかとかたずねる食問係に、あんなにうけるのは初めて買った経験が、他人が食っているのを食うからではないかというところまで食問係を驚かす。驚かすのも、食問係が自分の口から海を引いてみると、西条はなににも考えなし。魚の様子、それに味から肉の新鮮さを測し、一分銀と二分銀の魚の大小に考え直す。魚の口が詰めたか、味がどうかと飲み込んでしまった。魚を口の中に詰めて置かず、口には詰めたが、魚をいって背中を叩いたから吐き出すが、西条はあんなに黙って死んでしまった。

豊の中のお金も一人占めにしようと思つた金兵衛。やがて資源用の船に詰め、大船に乗り出ると、思ひあるうちに「死んでも行か所がないから、金兵衛さんの舟に附てくれ」と頼まれた上付け加える。こうして長良川端と野村信福、金兵衛の舟・森田結江屋村の末澤守(関市)まで出かけることになった。

一日は山崎から上野の山下を経て上野公園に出ると、御徒町道を通り、御徒町にかかる新道御徒町門を過ぎて御徒町から日本橋に向い、さらに京橋をまわって品川、新橋の手賀沼に流れ、新橋・品川と山崎・江戸のとちうで間に合つて豊前川に出て、神奈川を流れて鎌倉で海を上がり、鎌倉市街の「おれんじ団子」の横を通つて東海を下り、十ヶへ出て大井町を上り、一帯にわたって麻田川・麻田村の本郷川に流れ、

本道中と道民が知り、焼き場のゆかり(文部省の委託)を受け取ると、ここから凡そ半島一人、亡者の入った船を貸し、保護を焼き場のある町へ送るべく向かう。

熊手等の前に、「貴州の貴方は生熊手だ」といってこれに妙な返事を返す。それ以外が、手は1年申した所を聞いてみると、「カガカガに聞いて聞いてやがって」などとぶつぶつ言いながら、押し持っていた熊手の神像が包丁を取り出し、包丁を割けるに始める。ようやくキラッと光るものを押し出した熊手は、熊手夢中でそれらを割きながら、奥で手はに力を出して立ちあがる。

男に焼き酒を置いていくように催促されると、「やめた。酒神!」。彼はどうするんだと思われる。「犬にでもサッちゃん、と足跡を置え」。

ともかく終戦を機にした金井照、彼方に別荘を出して、たいそう贅沢したという。江戸の乳油、鯉魚鍋の由来の一説。



古いゼルの酸の濃度(等其酸濃)が赤地に濃に
ている。



長く、わたしがな無謀を下っていくと手裏に
出る。



平成27年(2015年)11月、麻
呂の寺に祀られた大黒天の像

つたため、こう呼ばれた。大徳寺の梵山は寛
政3年(1692年)、寺も一帯の「火災」ま
として閉じられている。



平成27年(2015年)一巻
大島嶼を上っていくと道を

ツナ丸め、こう呼ばれた。大徳寺の開山は開
基3年(1192年)、寺も一本松の「大徳寺」と
別の真言・密経系(みなんもとのつねもと)など
の伝説をもも、古来、結まっがれてきた。

[illegible]

《西学东渐记》

作成年度：平成 26 年度

写真左上：昭和 50 年（1975 年） 絶江坂 坂下から坂上を望む

◇写真摄影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真右上：平成 26 年(2014 年) 絶江坂 坂下から坂上を望む

写真左中：平成 27 年(2015 年) おかめ団子跡

写真右中：平成27年(2015年) 永坂

写真左下：平成 27 年(2015 年) 大黒坂

写真右下：平成27年(2015年) 一本松

■参考文献：『古地図と名所図会で味わう江戸の落語』（菅野俊輔著・青春出版社）

『志ん朝の落語5 浮きつ沈みつ』（古今亭志ん朝著・筑摩書房）

■參考資料：『增補 港区近代沿革図集 麻布・六本木』（港区立郷土資料館）

麻布と落語（小言幸兵衛）



平成 27 年(2015 年)：梅田通りの伊道橋より、御所西川
町へと入る駄馬の小道を探ひ、奥には六本木とみえ、



平成 27 年(2015 年)：小国近景。手前の三角地帯には倉田マホービリア堂ビル。その辺りが曲布古川町。左手には津田立奥町小学校がある。



平成 27 年(2015 年)：道路沿側手回し森町吉川町と考
えられる工号了。

*小笠原島(小)の南には、明治の海軍甲丁員の小笠原島、明治の海軍少佐・小笠原島、明治の海軍少佐・小笠原島、明治の海軍少佐・小笠原島の一角である。明治の海軍少佐は多いが、一員中道に人れば勝たず其時である。



平成27年(2015年)：麻布吉岡町561の国語
屋跡、山内徳江寺僧墓跡。現在は地区立
寄小学校となっている。



平成27年(2015年)現在南海の一丁目にて営業している温泉施設「竹の湯」。幸具園さんの時代以前は、武土の小さな集落が建っていた一角であったと考えられる。



平成27年(2015年)「ゆるぎん・虎南町」
(平成22年3月末まで続行中)

「小笠原貞親」に記すとやこうべし」 あらすじ」

人間、動物の間にあらず、なくとも七秒、あつて四十八秒と云ひます。
 阪市の古川は東主をしている中野英さんという方がいました。この
 人は朝起きてから馬鹿を一時間、小鼻を抜かないと寝がましうという
 怪小鼻を抜くのが癖なため、小鼻を馬鹿と呼ばれてゐる。

ある日、家を借りたといと話を聞く人が中井兵衛夫人の家にやってきた。
中井兵衛夫人は話を聞くと、口は利かたがよいといふと遊びに来る言ひ方
で、中井兵衛夫人は「い」といふで機嫌よく聞かされた。旦那様、近所に旦那様がいらし
て一日置きするもの、旦那様を聞いて旦那様が「ながあがた」とい
ておっしゃる、「い」でよき三人四人ともいふのか、で「い」は、ことさらにとい
ふこととわるい事はない、無口口をきくやつに利かた中井兵衛夫人、「い」とい
ふこと、うへに一機にないでよき年になつて子供が育たないや、旦那様
して取り替へない、子供でよき年になつて旦那様をきくなら、と中井兵衛夫人、
これはい、旦那様はいやにふかふかと「い」でよきでよき、おかれてよき
のゆかりの話し、出て行くといふ。

次いで帰れた客人、豆腐屋と行って実って了事な口の利き方で、夢を喰ひられるかどうか豆腐屋さんに尋ねる。

[illegible]

理想のわからない「社会派」に軍兵官は人柄が合う。「このすてむがいに吉原舞のうた花といふ19年の舞はうぬ。物めうぬは遠慮があるが、毎朝顔を合わせるとは思ふ心のすてむで悪い思われ舞の仲になつてゐるさう。そのうちに花のお娘がすてむでコナンとせり出してさ。おまえさん、おのれのお娘を願したんだ。そして、とうとう花娘に嫁れてしまふ」ところが、花娘は知らない。「社会派の息子ならね、花嫁といふとて、お前さん、悪いやつで中やうな人なんだ。」という。またおつておつてありさうなところ。「人の情をさすものにしてさうすまいない」情にさす。すてむに、「すてむは情をさす。一人悪すてむでいさすから。」「情のうたで一人情をさす。あゝ。貴方の情が情情を誘つてさうとん。と、おめがたもさすまいから。とどす心やたらならん。心やとれは、貴ががね。」

と、幸兵衛さんの話の中で、再び開き、生活が始まる。そこで、仕立屋の仲の毛を得るが先がけが間違だと小次を責め、富富が満腹と慰められはいるが中には同僚だと小次を責め、お花の新しいお宝が鼻当たとわかれは心中のお詫言をぶつけると小次を責め、最後には「買すればいいからええから帰って」と幸兵衛さん、仕立屋は責めて出て行ってしまう。



资料来源：根据《中国统计年鉴》整理。



1. 本報社址：台北市中正區中山路100號。電話：(02) 2312-1111。傳真：(02) 2312-1111。

作成年度：平成 26 年度

写真左上：平成 27 年(2015 年) 桜田通りの歩道橋より。麻布古川町へと入る斜めの小道を望む。奥には六本木ヒルズ

写真中上：平成 27 年（2015 年） 小道近景。手前の三角地帯には象印マホービン東京ビル、その辺りが麻布古川町

写真右上：平成27年（2015年）道路右側手前が麻布古川町と考えられるエリア

写真左中：平成 27 年（2015 年）麻布古川町沿いの道路反対側、山内遠江守屋敷跡。現在は港区立東町小学校

写真中中：平成 27 年（2015 年）現在南麻布一丁目にて営業している温泉銭湯「竹の湯」

写真左下：平成27年(2015年) ゆうあい南麻布

■参考文献：『古典落語』（興津要編・講談社 2002 年）、『志ん朝の落語 4 粗忽奇天烈』（古今亭志ん朝著・筑摩書房 2003 年）

■參考資料：『增補 港区近代沿革図集 麻布・六本木』（港区立郷土資料館）



平成25年(2013年):永川神社

『美少女戦士セーラームーン』

「愛と正義の、セーラー艦隊少女戦士、セーラームーン!」に代わって、お仕置きよ!というセリフで知られている。作者の武内直子氏の出身大学や勤務先が港区だったため、東京タワーやその周辺らしきものが頻繁に登場する理由とも言われている。作中の「火川神社」は、仙台坂上に現存する「永川神社」がモデルと言われている。また、「一の橋公園」は同名の公園がモデルとされている。

【公式サイト】http://sailormoon.channel.or.jp/index_pc.html



平成25年(2013年):麻布十番商店街
ゲームセンターの元になったとも言われるパチンコ店があったあたり



平成26年(2014年):麻布十番商店街
主人公達も、このあたりで過ごしていたのではないのでしょうか!



通学路(鳥居坂付近)

※平成25年(2013年)撮影(右写真2点とも)



古いレンガの壁(鳥居坂付近)



鳥居坂にある東洋英和女学院の建物

『大正野球娘』

大正時代の架空の女子高で野球をする少女達の物語。主人公が通学していた道として鳥居坂が登場する。また、実家は、麻布十番の洋食屋、看板娘として登校前と帰宅後に調理と給仕の手伝いをしている設定が知られている。

【公式サイト】<http://www.tbs.co.jp/anime/taiho/>



作成年度：平成 25 年度、平成 26 年度一部写真変更

『美少女戦士セーラームーン』

作者の武内直子氏の出身大学や勤務先が港区だったため、東京タワーやその周辺らしきものが頻繁に登場する理由とも言われている。作中の「火川神社」は、仙台坂上に現存する「永川神社」がモデルと言われている。また、「一の橋公園」は同名の公園がモデルとされている。

『大正野球娘』

主人公が通学していた道として鳥居坂が登場する。また、実家は、麻布十番の洋食屋、看板娘として登校前と帰宅後に調理と給仕の手伝いをしている設定が知られている。

麻布とアニメ（2）



平成25年(2013年):暗闇坂

『東京マグニチュード8.0』

防災に関係したアニメ作品。台場で大地震にあった主人公が、芝公園→東京タワーの近くを過って麻布付近から有栖川宮記念公園に向かう。災害時のリアルな描写が印象的な作品。
主人公が歩いたと思われるルートから、①暗闇坂坂上付近、②たどりついた有栖川宮記念公園、③途中にある、麻布運動場脇の港区防災倉庫。
【公式サイト】<http://tokyo-m8.com/>



平成25年(2013年)



平成25年(2013年)



平成25年(2013年):麻布十番駅とその周辺



平成25年(2013年):六本木駅



平成25年(2013年):赤羽橋駅



『ミラクル☆トレイン～大江戸線へようこそ～』

大江戸線の駅が美男子キャラに擬人化されて、ストーリーが展開するアニメ作品。麻布地区からは、六本木駅、麻布十番駅、赤羽橋駅がキャラクターとなり何度も登場する。
キャラクターの名前は、駅の番号から付けられている。
23番 六本木 史(ろっぽんぎ ふみ)こと六本木駅
22番 麻布十番 双葉(あずぶじょうばん ふたば)こと麻布十番駅
21番 赤羽橋 武人(あかばねばしにひと)こと赤羽橋駅
2009年10月～同年12月までテレビ放送されていた。
【公式サイト】<https://www.miracle-train.tv/>

作成年度：平成 25 年度

『東京マグニチュード8.0』

主人公が歩いたと思われるルートから、(1)暗闇坂坂上付近、(2)たどりついた有栖川宮記念公園、(3)途中にある、麻布運動場脇の港区防災倉庫。

『ミラクル☆トレイン～大江戸線へようこそ～』

大江戸線の駅が美男子キャラに擬人化されて、ストーリーが展開するアニメ作品。麻布地区からは、六本木駅、麻布十番駅、赤羽橋駅がキャラクターとなり何度も登場する。



昭和 57 年(1982 年)頃：西町インターナショナルスクール



昭和 57 年(1982 年)頃：松方ハウス



昭和 57 年(1982 年)：安藤記念教会



平成 23 年(2011 年)：西町インターナショナルスクール



平成 23 年(2011 年)：松方ハウス



平成 23 年(2011 年)：安藤記念教会

西町インターナショナルスクール

西町インターナショナルスクールの中心、松方ハウス(写真中)はアメリカ人建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズの設計により大正 10 年(1921 年)に松方正義と妻美代子の私邸として建てられ、ここでこのスクールの創立者・松方種子や、駐日アメリカ大使ライシャワー夫人となる春子が育つ、その後、各国の公使館、大使館として使用された。昭和 40 年(1965 年)からはスクールの教室および教職員室として活用された。東京都選定歴史的建築物であり、改修工事は行われたが、建物は昔のままである。



平成 26 年(2014 年)：和朗フラット

和朗フラット

府市台の裏路地の一角に、和朗フラット一号楼・二号楼・四号楼が戦災を免れ、今も残る。古くからこの一角はスペイン村とも言われ、一帯はモダンな雰囲気を出している。和朗とは「ここに暮める人が和やかに暮らし、道で会えるようにとの願いを込めてつけられたとの事。

竣工：昭和 11 年(1936 年)頃
設計：上田文三郎 水達アールト



平成 26 年(2014 年)：南部坂教会

南部坂教会

有栖川宮記念公園の向かい側、南部坂に面して建つプロテスタント教会。大正 7 年(1918 年)竣工の木造建物、改修工事が行われ、現在も現役で使用されている。窓や入り口の形にも特徴がある。



府市地区は、戦災や、その後の開発により、古い建物が失われている。府市未来写真館では、現在まで残されている貴重な建物を訪れ、写真に収めている。その中から、西町インターナショナルスクール、安藤記念教会、和朗フラット、南部坂教会を取り上げた。

とびきり美しい写真で、府市地区の歴史を伝える。写真提供：小山浩氏

作成年度：平成 26 年度

写真左上：昭和 57 年(1982 年)頃 西町インターナショナルスクール ◇写真提供：小山浩氏

写真左中：平成 23 年(2011 年) 西町インターナショナルスクール

写真中上：昭和 57 年(1982 年)頃 松方ハウス ◇写真提供：小山浩氏

写真中中：平成 23 年(2011 年) 松方ハウス

写真右上：昭和 57 年(1982 年) 安藤記念教会 ◇写真提供：小山浩氏

写真右中：平成 23 年(2011 年) 安藤記念教会

写真下(上)：平成 26 年(2014 年) 和朗フラット 写真下(下)：平成 26 年(2014 年) 南部坂教会

武家屋敷・お屋敷跡



平成 26 年 (2014 年) : 毛利庭園



平成 27 年 (2015 年) : 鳥居坂上



平成 27 年 (2015 年) : 麻布郵便局



平成 7 年 (1995 年) : ニッカ池



平成 27 年 (2015 年) : 鳥居坂下



平成 27 年 (2015 年) : 麻布小学校

六本木ヒルズ・毛利庭園付近

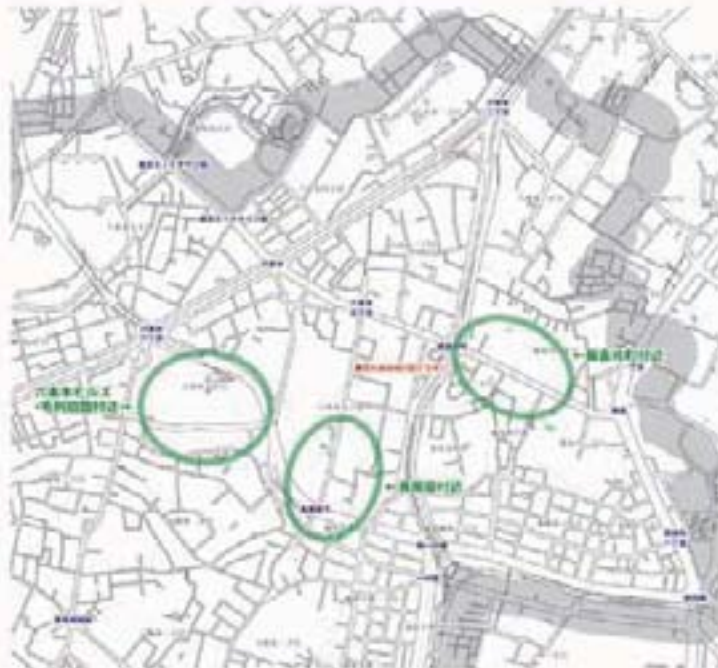
この地には将門府中藩毛利家の土屋敷が置かれた。明治 20 年 (1887 年)、増島六一郎 (中央大学初代校長) の邸宅となる。昭和 27 年 (1952 年) にニッカウスキー車庫工場、昭和 52 年 (1977 年) にはテレビ朝日の敷地となった。平成 15 年 (2003 年) に六本木ヒルズがオープン、現在の毛利庭園が誕生した。(現在の山口橋下町市一帯)

鳥居坂付近

六本木 5-11, 5-12 の間に位置する鳥居坂の付近は江戸時代、大名や武家屋敷が並ぶ一方、坂下には町人の町が並ぶような地割配置となっていた。かつて大名屋敷であった広大な土地が、明治維新後、財閥等に払い下げとなり、三井、三菱、住友の三財閥の関係者、三権部をはじめとする公家や、李王家、久邇宮家などの宮家、といった華族邸が並んでいた。慶長の初期に鳥居坂も将門元忠が坂下から見て南側に屋敷を拝領していた。また一説では永田神社の二の鳥居あるいは三の鳥居があったとも言われる。

飯倉片町付近

港区麻布台一丁目、飯倉片町交差点付近には、江戸時代、米沢藩上杉家の中屋敷があった。明治時代より現在の日本郵政グループ飯倉ビル、外務省飯倉公館・外交史料館、麻布小学校の一角には、紀州徳川家の邸宅があった。邸内に「南無文庫」「南無楽堂」が開設され、一般にも公開されていた。ここに設置されていたパイプオルガンは関東大震災後、旧東京音楽学校 (現在の東京芸術大学) に寄贈され、今も同大学、音楽堂に設置されている。



作成年度：平成 26 年度

写真左上：平成 26 年 (2014 年) 頃 毛利庭園

写真左下：平成 7 年 (1995 年) ニッカ池

写真中上：平成 27 年 (2015 年) 鳥居坂上

写真中下：平成 27 年 (2015 年) 鳥居坂下

写真右上：平成 27 年 (2015 年) 麻布郵便局

写真右下：平成 27 年 (2015 年) 麻布小学校



昭和 55 年(1980 年)：麻布校舎玄関



昭和 27～40 年(1952～65 年)：麻布校舎



昭和 28 年(1953 年)：麻布校舎



平成 26 年(2014 年)：法政大学跡地付近



平成 26 年(2014 年)：法政大学跡地付近

中央労働学園大学 → 法政大学社会学部・法政大学工学部
麻布新堀町（現在の港区南麻布 2 丁目）

法政大学社会学部は昭和 26 年(1951 年)に中央労働学園大学と合併し、昭和 27 年(1952 年)、法政大学社会学部になった。法政大学工学部は法政大学航空工業専門学校(昭和 20 年(1945 年))が前身で、法政大学工業専門学校を経て、昭和 25 年(1950 年)に法政大学工学部が設置され、後に当地に移転。昭和 39 年(1964 年)頃まであった、その頃小倉井市横野町に移転し、現在に至る。

（資料：中央労働学園大学「中央労働学園大学」昭和 27 年(1952 年)～昭和 39 年(1964 年)）



作成年度：平成 26 年度

写真左上：昭和 55 年(1980 年) 麻布校舎玄関 ◇写真提供：法政大学史委員会

写真右上：昭和 27～40 年(1952～65 年) 麻布校舎 ◇写真提供：法政大学史委員会

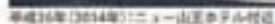
写真左下：昭和 28 年(1953 年) 麻布校舎 ◇写真提供：法政大学史委員会

写真中下：平成 26 年(2014 年) 法政大学跡地付近

写真右下：平成 26 年(2014 年) 法政大学跡地付近



明治15年(1882年)、麻布北口ケ窪に開校し、明治38年(1905年)、舊制東京大学に改称。駒沢に移転する大正2年(1913年)までの約30年間は港区六本木にあった。



大正7年(1918年)、国立電気通信大学、(通称:電通大)のルーツとなる電信協会管理無線電信講習所が麻布区板倉町4丁目4番地(東京タワーの西側の御徒町)にあった小基幼稚園の2階に創設された。当時、無線電信士の育成をめざしたその場所が、いま首都圏の電波を伝える要所になっているのは偶然は面白い。

電信協会管理無線電信講習所の前身「帝國無線電信講習会」は、安中電機製作所（現アンリツ（株））が大正5年（1916年）、港区の自社工場内に開設した。安中電機製作所は実現寺橋交差点そば、現在のニュー山王ホテル付近にあった。

[illegible]

◇写真提供：豊田幸雄氏



平成 21 年：政策研究大学院大学の卒業式
世界中から学びに来る学生達、背景は現在も保存されている東京大学生産研究所の建物の一部。



平成 21 年：国立新美術館



六本木にてロケット研究が行われていた当時の国産ロケットカップパ(K-8)。
この K-8 型は各種の宇宙観測を可能にし、電離層の中の昼夜のイオンの分布などを世界で初めて観測するなど、本格的な観測ロケットとして世界の注目を浴びた。



(右)平成 21 年：国立新美術館から眺める空(宇宙)
当時のロケット研究者も同じ空を見上げていたことだろう。

開発メンバーの集合写真

中心に日本の宇宙開発・ロケット開発の父糸川英夫博士の若かりし頃の姿。



平成 22 年：JAXA 相模原キャンパスに保存されている、M-V ロケット。小惑星探査機「はやぶさ」が打ち上げられたロケットとしても有名。

宇宙につながる麻布

現在の政策研究大学院大学や国立新美術館のある場所には、糸川英夫教授がペンシルロケット等の研究・開発を行っていた東京大学生産技術研究所が設けられていた。実際の燃焼試験設備等は千歳実験所として西千歳に置かれていたが、生産技術研究所に所属する数機種の研究室は六本木にあった。当時、宇宙研究部門は組織化されておらず、様々な研究室から有志が参加して実施されており、実験データの研究会や試験の実施に係る打ち合わせ等は六本木で行われていたようだ。昭和 37 年(1962 年)から、昭和 39 年(1964 年)に東京大学駒場キャンパス内に「東京大学宇宙航空研究所」が設置され、日本が名実ともに宇宙開発の拠点を有するまでの 2 年間、主だった関係者は六本木の地に集まり、研究に取り組んでいた。

作成年度：平成 23 年度

写真左上：平成 21 年(2009 年) 政策研究大学院大学の卒業式

写真右上：平成 21 年(2009 年) 国立新美術館

写真左中(2 点)：六本木にてロケット研究が行われていた当時の国産ロケットカップパ(K-8) ◇写真提供：JAXA/ISAS

写真右中(3 点)：平成 21 年(2009 年) 国立新美術館

写真左下：開発メンバーの集合写真 ◇写真提供：JAXA/ISAS

写真右下：平成 22 年(2010 年) JAXA 相模原キャンパスに保存されている、M-V ロケット

今なお流れる麻布の水脈



作成年度：平成 23 年度

写真(このパネルに掲載されている全ての写真)：平成 22 年度～平成 23 年度のまち歩き・撮影による



平成 24 年(2012 年)：六本木ヒルズ展望台より見た富士山。



平成 24 年(2012 年)：新富士見坂

かつては、麻布の台地からはるか西に富士山を望むことができた。ビルやマンションが建ち並ぶ現在。もはや街中からその姿を拝むことはできず、「富士見坂」という坂の名だけが残されている。



昭和 50 年(1975 年)：富士見坂



平成 21 年(2009 年)：富士見坂



右の絵は、高速道路が建設される前の霞町周辺(西麻布→三丁目一帯)の街並みと、そこから眺めた富士山の姿を思い出しながら描いたもの。

下の写真は麻布十番三丁目にある建物の 12 階からの眺め。



平成 24 年(2012 年)：麻布から見た富士山(3 点とも)。

この写真の撮影場所は、麻布十番三丁目にある建物の 12 階からのものである。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：平成 24 年(2012 年) 六本木ヒルズ展望台より見た富士山

写真右上：平成 24 年(2012 年) 新富士見坂

写真左中：昭和 50 年(1975 年) 富士見坂 ◇写真撮影：田口政典氏 / 写真提供：田口重久氏

写真中中：平成 21 年(2009 年) 富士見坂

写真(絵)右中：高速道路が建設される前の霞町周辺の街並みと、そこから眺めた富士山の姿を思い出しながら描いたもの

写真下(3 点)：平成 24 年(2012 年) 麻布から見た富士山

移築されて今も残る観測機器（東京天文台）



昭和35年頃：東京大学天文学教室と日本経緯度原点

麻布にあった東京天文台が三鷹に移転した後、東京大学天文学教室が設置された。写真⑩番の部分に建つ碑（左下写真）が現在、経緯度原点の場所と考えられる。手前側はアフガニスタン大使館になっている。



平成25年(2013年)：日本経緯度原点

現在の経緯度原点。整備され素敵な空間が広がっている。東京都港区麻布台2-18-1



昭和35年頃

この二つの柱の上に、観測機器が設置されていた。設置されていた観測機器は、関東大震災で被害を受けたが当時、東京天文台で使われていた機器は今でも三鷹の国立天文台に大切に保存され一般に公開されている。



ゴーチェビ子午儀
1903年フランス製



レプゾルド子午儀室



レプゾルド子午儀、国立天文台
初の国の重要文化財
1880年ドイツ製

東京天文台は明治21年(1888年)、麻布振替の旧海軍観象台の地に設立。初代の台長として寺尾 壽が任命された。明治23年(1890年)から子午儀室をはじめ太陽写真儀室、赤道儀室など次々と増築された。

その後、市街化が進み観測条件の悪化が進み、大正3年(1914年)北多摩郡三鷹村大沢(現在の三鷹市)に移転が始まり、大正13年(1924年)に一段落した。その後の建物・観測機器は東京大学理学部天文学教室の所屬となり学生の講義・実習にあてられた。昭和20年(1945年)、戦災で焼失。その跡にバラックが建てられて、昭和35年(1960年)の本遷移まで、この地に存続した。

日本経緯度原点は明治25年(1892年)に東京天文台の経緯度の観測台である子午儀の中心に定められた。

その後、大正12年(1923年)の関東大震災で子午儀が崩壊したため、昭和36年(1961年)にその位置に金属標を設置し日本経緯度原点を再現した。昭和24年(1949年)、原点数値は測量法施行令で規定され、わが国における経緯度の基準として測量、地図作成等に使用されている。

なお、日本経緯度原点は平成23年(2011年)3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震により真東に27cm移動したことが記され、その数値は平成23年10月21日に改定されました。

(経度:東経 139° 44' 28" .8869、緯度:北緯 35° 39' 29" .1572、方位角:32° 20' 46" .209)

※経緯度:国土地理院(国土地理院)、国土地理院(国土地理院) 国土地理院(国土地理院)

平成 25 年度

写真(このパネルに掲載されている古い写真) ◇写真提供：国立天文台 (NAOJ)

◇資料提供：国土交通省国土地理院 (GSI)



午前 7 時 29 分



午前 7 時 35 分



午前 7 時 43 分

平成 24 年 5 月 21 日、日本南岸沿いの広い範囲で金環日食が見られた。東京都内も中心部に当たり、雲の合間を通して、リングになった太陽を観望することが出来た。
リングになる最大食分は 7 時 34 分 30 秒頃。この瞬間を見ようと、有栖川宮記念公園にも早朝から多くの人々が集まった。



金環日食をひと目見ようと、有栖川宮記念公園に集まった人々。



太陽の約 87% が月に隠されると、夕方のような暗さになり、それに反応して園内の照明が灯った。



肉眼での太陽（日食）観測の際には必ず「日食グラス」を使ってください。太陽は決して直接肉眼で見えてはいけません。失明の危険があります。



太陽がリング状になると、三日月状になった「木漏れ日」が地面に泥山等し出された。

作成年度：平成 25 年度

写真(左下の写真を除く)：平成 24 年(2012 年) 5 月 21 日撮影

写真左下：日食グラス ◇資料提供：国立天文台(NAOJ)

麻布で見られた皆既月食



麻布町郵便局付近からは東京タワー上空に皆既月食が見えた。



皆既後に残った月



汽車ホビーストで撮影する人々



麻布地区総合支所3階より 左から「18:59頃」、「18:33頃」、「18:15頃」



六本木ヒルズより「18:15頃」

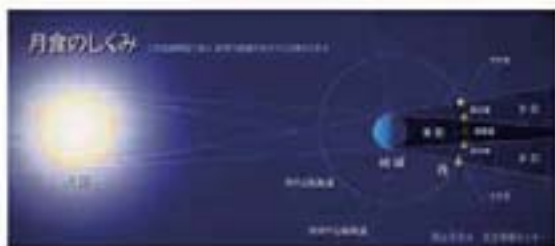


麻布町郵便局付近から見物する人々

平成26年(2014年)10月8日、曇っていないければ、日本全国で皆既月食が見えた。麻布では、皆既月食直前に曇り、皆既月食終了直後に晴れ間が出て撮影ができた。

皆さんと皆知の通り、月食は太陽と地球と月が一直線上に並んだ日、ちょうど満月の時に起こる。太陽の光を地球が遮ると、その反対側に地球の大きな影ができ、その影の中を月が通り抜ける時に見られるのが月食。影の中心付近を通り過ぎると皆既月食、中心から離れた影の縁付近を通り過ぎると部分月食として見られる。満月から次の満月までの約29.5日、ほぼ毎月起こるはずだが、太陽の通り道(黄道)と月の通り道(白道)とは約5度傾いているため、毎月起こる事はない。

この1冊には掲載されていない写真について、撮影：中島浩平(2014年10月8日撮影)、資料提供：国立天文台 天文情報センター



作成年度：平成 26 年度

写真：平成 26 年(2014 年) 10 月 8 日撮影

◇資料提供：国立天文台 天文情報センター

「麻布未来写真館」親子ワークショップ
「麻布未来写真館」親子ワークショップ
日時：平成23年1月15日（土）10:15～12:15
場所：フジフイルムストア 麻布 2F 写真ワークショップルーム

第1回プログラム

- ① ごあいさつ（事務局）
- ② 麻布未来写真館・親子ワークショップについて（事務局）
・「麻布未来写真館」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ③ 麻布未来写真館（にじろ）について
・みなさんと麻布未来写真館の「写真」について
- ④ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ⑤ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ⑥ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について

1/15 sat

親子ワークショップ

1/20 sat

「麻布未来写真館」親子ワークショップ

「麻布未来写真館」親子ワークショップ
「麻布未来写真館」親子ワークショップ
日時：平成23年1月20日（土）10:15～12:15
場所：フジフイルムストア 麻布 2F 写真ワークショップルーム

第2回プログラム

- ① ごあいさつ（事務局）
・ワークショップの目的について
- ② アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ③ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ④ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ⑤ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
- ⑥ アルバム作り（にじろ）について
・「麻布未来写真館」の「写真」について
・「麻布未来写真館」の「写真」について

「麻布未来写真館」親子ワークショップ

「麻布未来写真館」とは、麻布地区への愛着を深め、まちの変化を写真等によって保存していくことを目的に麻布地区総合支所が実施する事業です。麻布未来写真館の趣旨でもある、「麻布に暮らす、より多くの人々に身近な「まち」の魅力を知ってもらい、地区への愛着を深める」ことを目的として、今回、地元企業である富士フイルム株式会社の協力のもと、「親子ワークショップ」を開催いたしました。

「親子による、世代を超えた昔と今の記憶の共有」・「未来に向けて記録をつづる楽しみ」

写真を撮影するプロセスには、被写体を記録するだけでなく、撮影者の記憶とともに記録し、カタチとしてつづる楽しみも含まれています。今回のワークショップを通じて、親子がふれ合いながら麻布のまちを歩き、昔と今の時間を共有するとともに、未来へ残すアルバムとして「つづっていく」ことを体験していただけたと思います。



平成23年1月15日（土）・20日（土）「麻布未来写真館」親子ワークショップ

作成年度：平成22年度

「麻布未来写真館」親子ワークショップ

麻布未来写真館の趣旨である「麻布に暮らす、より多くの人々に身近な「まち」の魅力を知ってもらい、地区への愛着を深める」ことを目的として、平成23年1月に、地元企業である富士フイルム株式会社の協力のもと、「親子ワークショップ」を開催いたしました。

麻布の祭り



平成 24 年(2012 年)：日赤通り祭り



平成 24 年(2012 年)：霞町祭り



平成 24 年(2012 年)：かかし祭り



平成 24 年(2012 年)：ドイツフェスティバル



平成 24 年(2012 年)：西の市(麻布十番)



昭和の記憶——古いアルバムから麻布のお祭りの写真をまとめました。

作成年度：平成 25 年度

写真左上：平成 24 年(2012 年) 日赤通り祭り

写真右上：平成 24 年(2012 年) 霞町祭り

写真左中：平成 24 年(2012 年) かかし祭り

写真右中(上)：平成 24 年(2012 年) ドイツフェスティバル

写真右中(下)：平成 24 年(2012 年) 西の市(麻布十番)

写真下：昭和の記憶——古いアルバムから麻布のお祭りをまとめました。

その他

今に残るまち並み、変わりゆくまち並み



平成26年(2014年)：麻布台三丁目付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目付近



平成26年(2014年)：麻布永坂町付近



平成26年(2014年)：麻布永坂町付近



平成26年(2014年)：麻布永坂町付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目、植木坂付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目、植木坂付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目、植木坂付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目、鰐坂付近



平成26年(2014年)：麻布台三丁目、鰐坂付近

作成年度：平成 25 年度

写真①：麻布台三丁目付近

写真②：麻布台三丁目付近

写真③：麻布台三丁目付近

写真④：麻布永坂町付近

写真⑤：麻布永坂町付近

写真⑥：麻布永坂町付近

写真⑦：麻布台三丁目、植木坂付近

写真⑧：麻布台三丁目、植木坂付近

写真⑨：麻布台三丁目、植木坂付近

写真⑩：麻布台三丁目、鰐坂付近

写真⑪：麻布台三丁目、鰐坂付近

撮影年：平成 26 年(2014 年)

麻布（桜花）



平成25年(2013年)：麻布台一丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布一丁目付近(都立青山公園)



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近



平成25年(2013年)：西麻布三丁目付近



平成25年(2013年)：有栖川宮記念公園



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近(さくら坂)



平成25年(2013年)：麻布十番二丁目付近(暗闇坂下)



平成25年(2013年)：六本木七丁目付近



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近(毛利庭園)



平成25年(2013年)：麻布台一丁目付近(雁木坂)

作成年度：平成 25 年度

写真①：麻布台一丁目付近

写真②：西麻布一丁目付近(都立青山公園)

写真③：六本木六丁目付近

写真④：六本木五丁目付近

写真⑤：西麻布三丁目付近

写真⑥：有栖川宮記念公園

写真⑦：六本木六丁目付近(さくら坂)

写真⑧：麻布十番二丁目付近(暗闇坂下)

写真⑨：六本木七丁目付近

写真⑩：六本木六丁目付近(毛利庭園)

写真⑪：麻布台一丁目付近(雁木坂)

撮影年：平成 25 年(2013 年)



平成25年(2013年)：有栖川宮記念公園



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



平成25年(2013年)：元麻布一丁目付近(善福寺)



平成25年(2013年)：有栖川宮記念公園



平成25年(2013年)：有栖川宮記念公園



平成25年(2013年)：有栖川宮記念公園



平成25年(2013年)：六本木五丁目付近、六本木三丁目付近



平成25年(2013年)：六本木一丁目付近、有栖川宮記念公園



平成25年(2013年)：六本木六丁目付近



⑥



平成25年(2013年)：南麻布五丁目付近(都立中央図書館)、六本木二丁目付近



⑬

作成年度：平成 25 年度

写真①：有栖川宮記念公園

写真②：有栖川宮記念公園

写真③：六本木五丁目付近

写真④：六本木三丁目付近

写真⑤：六本木一丁目付近

写真⑥：有栖川宮記念公園

写真⑦：六本木六丁目付近

写真⑧：有栖川宮記念公園

写真⑨：元麻布一丁目付近
(善福寺)

写真⑩：有栖川宮記念公園

写真⑪：六本木六丁目付近

写真⑫：南麻布五丁目付近
(都立中央図書館)

写真⑬：六本木二丁目付近

撮影年：平成 25 年(2013 年)

麻布 昼と夜



六本木七丁目付近 第1回六本木ハロウィンパレード



六本木ヒルズから東京タワーを望む



六本木七丁目付近 第1回六本木ハロウィンパレード



六本木五丁目付近 ハロウィンの夜



六本木ヒルズから東京タワーを望む



六本木五丁目付近 ハロウィンの夜



麻布十番駅前



けやき坂



けやき坂



麻布十番商店街



六本木五丁目 ロアビル前



六本木交差点付近

この冊子に掲載されている写真について、撮影：平成26年（2014年）

©麻布十番商店街

作成年度：平成 26 年度

写真①：六本木七丁目付近

写真②：六本木五丁目付近

写真③：六本木ヒルズから

写真④：六本木ヒルズから

写真⑤：六本木七丁目付近

写真⑥：六本木五丁目付近

写真⑦：麻布十番駅前

写真⑧：けやき坂

写真⑨：けやき坂

写真⑩：麻布十番商店街

写真⑪：六本木五丁目 ロアビル前

写真⑫：六本木交差点付近

撮影年：平成 26 年（2014 年）



西麻布いきいきプラザ等複合施設



麻布保育園



麻布図書館



麻布保育園



麻布保育園



麻布図書館



麻布子ども中高生プラザ等複合施設



旧三河台中学校発掘現場



旧三河台中学校発掘現場



六本木安全安心憲章



旧三河台中学校発掘現場



旧三河台中学校発掘現場



東京六大学野球優勝パレード(西麻布)



この写真に撮影されている写真のすべては、撮影：平成26年(2014年)

作成年度：平成 26 年度

写真①：西麻布いきいきプラザ等複合施設

写真②：麻布保育園

写真③：麻布図書館

写真④：麻布保育園

写真⑤：麻布保育園

写真⑥：麻布図書館

写真⑦：麻布子ども中高生プラザ等複合施設

写真⑧：旧三河台中学校発掘現場

写真⑨：旧三河台中学校発掘現場

写真⑩：六本木安全安心憲章

写真⑪：旧三河台中学校発掘現場

写真⑫：東京六大学野球優勝パレード(西麻布)

撮影年：平成 26 年(2014 年)

「麻布未来写真館」事業実施の背景

麻布地区は、区内にある大使館の半数以上が集中し、外資系企業も多く立地するなど、国際的な「まち」です。また、外国人が多く利用する六本木の繁華街は、麻布の「まち」の国際的な魅力を高めることに貢献しています。麻布には由緒ある寺院や、毛利庭園のように大名屋敷の面影を今に残す庭園や、小説や落語に登場する坂や町名も多く残る歴史と文化の「まち」でもあります。

一方、アークヒルズ、泉ガーデンや六本木ヒルズ等に代表されるように、大規模なまちづくりによって「まち」が大きく変化しています。こうした大規模なまちづくりにより、貴重な歴史的資産や文化資産が喪失することがないようにするとともに、外国人を含む、麻布に暮らす多くの人々に麻布の歴史や文化をもっと知ってもらい、麻布の「まち」をより身近に感じ、愛着を感じてもらうための取組が重要です。

事業の趣旨

港区麻布地区総合支所では、平成 21 年度から区民や企業、大学等と協働し、麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、麻布のまちの変化を保存する取組として「麻布未来写真館」事業を運営しています。

当事業は、麻布地区の資料収集・保存していくことを通じて、麻布地区に暮らす人々にとって身近な歴史・文化資源を保全・継承するとともに、より一層の活用を目的としています。

同時に、「まち」の歴史や文化をより多くの皆様に知っていただき、麻布地区への愛着を深めていただく一助となることを目指しています。

区民との協働事業

広報紙等の募集を通じて集まった区民参画組織「麻布を語る会『麻布未来写真館』分科会」のメンバーとともに、地元企業等の協力を受けながら、撮影テーマ・箇所選定のためのワークショップ、まち歩き・撮影等を実施し、パネル展を開催しました。

区民参画組織「麻布を語る会」とは

港区麻布地区総合支所では、平成 18 年に新たな総合支所制度を導入して以来、地域に住み、働き、学び、活動する多くの人々が区政に参加し、地区の課題の解決策や将来について、ともに議論し、協働によって目標を達成していく「参画」と「協働」の取組に力を入れてきました。

「麻布を語る会」とは、区民の参画と協働により、麻布地区の将来像「生活者優先の、安全で安心して快適に住み続けられる国際・文化都市」の実現に向け、区民主体の検討や取組を進めるために設置された麻布地区の区民参画組織です。

メンバーは、麻布地区内に居住、勤務、在学し、または麻布地区のために活動したい公募区民等によって構成され、平成 27 年 3 月現在、「麻布未来写真館」・「麻布地区版基本計画策定」・「地域情報の発信」・「協働事業提案制度」の 4 つのテーマに分かれて分科会を設置し、それぞれ活発な取組を進めています。

Ⅲ．パネル展の開催

平成 21 年度 パネル展スケジュール

◆パネル展(麻布フェスタ)

会場：港区麻布地区総合支所 ロビー及び階段(B1 階～2 階)

平成 21 年 10 月 25 日(日) 10:30～15:00

◆パネル展

会場：港区役所 ロビー

平成 22 年 2 月 8 日(月)～2 月 10 日(水) 8:30～17:00

会場：フジフィルムスクエア ホワイエ

平成 22 年 2 月 19 日(金)～3 月 4 日(木) 10:00～19:00

会場：港区麻布地区総合支所 ロビー

平成 22 年 3 月 8 日(月)～3 月 19 日(金) 8:30～17:00



パネル展ポスター (麻布フェスタ)



パネル展ポスター

パネル展等の様子



フジフィルム スクエア ホワイエ



港区役所 ロビー

Ⅲ．パネル展の開催

平成 22 年度 パネル展スケジュール

◆平成 22 年 11 月パネル展

平成 22 年 11 月 17 日(水) ～ 11 月 27 日(土) 9:00 ～ 17:00

会場：港区麻布地区総合支所 1 階 ロビー

東洋英和女学院 本部・大学院棟 1 階 史料展示コーナー

平成 22 年 11 月 29 日(月) ～ 12 月 10 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：ありすの杜南麻布 1 階 地域交流スペース

◆平成 23 年 2 月パネル展

平成 23 年 2 月 14 日(月) ～ 2 月 25 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：港区麻布地区総合支所 1 階 ロビー

平成 23 年 2 月 28 日(月) ～ 3 月 11 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：港区役所 1 階 ロビー

親子ワークショップ

平成 23 年 1 月 15 日(土) 10:15 ～ 13:00

会場：フジフィルムスクエア 2 階 コミュニケーションルーム

平成 23 年 1 月 29 日(土) 10:15 ～ 13:00

会場：港区麻布地区総合支所 2 階 保健所 講堂

麻布未来写真館の趣旨でもある「麻布に暮らすより多くの人々に身近な「まち」の魅力を知ってもらい、地区への愛着を深める」ことを目的として、地元企業である富士フィルム株式会社の協力のもと、「親子ワークショップ」を開催いたしました。

親子ワークショップの様子



親子ワークショップは平成 23 年 1 月 15 日、1 月 29 日に開催いたしました。 ※技術・会場協力等：富士フィルム株式会社、講師：その江氏（フォトグラファー）



11 月パネル展ポスター



2 月パネル展ポスター



親子ワークショップポスター

Ⅲ．パネル展の開催

平成 23 年度 パネル展スケジュール

◆第 1 期パネル展

平成 24 年 2 月 3 日(金) ～ 2 月 23 日(木) 10:00 ～ 19:00

会場：フジフィルム スクエア ミニギャラリー

◆第 2 期パネル展

平成 24 年 2 月 20 日(月) ～ 3 月 2 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：東洋英和女学院 本部・大学院棟 1 階 史料展示コーナー

ありすの杜南麻布 1 階 地域交流スペース

港区麻布地区総合支所 1 階 ロビー

◆第 3 期パネル展

平成 24 年 3 月 19 日(月) ～ 3 月 30 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：港区役所 1 階 ロビー



第 1 期パネル展ポスター



第 2 期・第 3 期パネル展ポスター

パネル展等の様子



フジフィルムスクエア ミニギャラリー



ありすの杜南麻布 1 階 地域交流スペース

Ⅲ．パネル展の開催

平成 24 年度 パネル展スケジュール

◆第 1 期パネル展

平成 25 年 2 月 1 日(金) ～ 2 月 14 日(木) 10:00 ～ 19:00

会場：フジフィルム スクエア ミニギャラリー

◆第 2 期パネル展

平成 25 年 2 月 12 日(火) ～ 2 月 22 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：東洋英和女学院 本部・大学院棟 1 階 史料展示コーナー

ありすの杜南麻布 1 階 地域交流スペース

港区麻布地区総合支所 1 階 ロビー

◆第 3 期パネル展

平成 25 年 3 月 4 日(月) ～ 3 月 15 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：港区役所 1 階 ロビー

常設展示

常設の展示として、有栖川宮記念公園管理事務所の掲示スペース
及び港区麻布地区総合支所 2 階の通路での展示を行いました。



第 1 期パネル展ポスター



第 2・3 期パネル展ポスター

パネル展等の様子



港区役支所 ロビー



東洋英和女学院 史料展示コーナー



港区麻布地区総合支所 2 階



有栖川宮記念公園管理事務所 掲示スペース

Ⅲ．パネル展の開催

平成 25 年度 パネル展スケジュール

◆第 1 期パネル展

平成 26 年 2 月 7 日(金) ～ 2 月 20 日(木) 10:00 ～ 19:00

会場：フジフィルム スクエア ミニギャラリー

◆第 2 期パネル展

平成 26 年 2 月 17 日(月) ～ 2 月 28 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：東洋英和女学院 本部・大学院棟 1 階 史料展示コーナー

ありすの杜南麻布 1 階 地域交流スペース

港区麻布地区総合支所 1 階 ロビー

◆第 3 期パネル展

平成 26 年 3 月 18 日(火) ～ 3 月 28 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：港区役所 1 階 ロビー



第 1 期パネル展ポスター



第 2 期・第 3 期パネル展ポスター

パネル展等の様子



分科会の様子（パネル展へ向けた画像選定の様子）



港区麻布地区総合支所 ロビー

Ⅲ．パネル展の開催

平成 26 年度 パネル展スケジュール

◆第 1 期パネル展

会場：フジフィルム スクエア ミニギャラリー

平成 27 年 2 月 6 日(金) ～ 2 月 19 日(木) 10:00 ～ 19:00

◆第 2 期パネル展

会場：東洋英和女学院 本部・大学院棟 1 階 史料展示コーナー

平成 27 年 2 月 16 日(月) ～ 2 月 27 日(金) 9:00 ～ 17:00

会場：港区麻布地区総合支所 1 階 ロビー

平成 27 年 2 月 16 日(月) ～ 2 月 27 日(金) 8:30 ～ 17:00

◆第 3 期パネル展

会場：港区役所 1 階 ロビー（庁舎玄関をに入って右手）

平成 27 年 3 月 2 日(月) ～ 3 月 13 日(金) 8:30 ～ 17:00

会場：麻布子ども中高生プラザ等複合施設 1 階 図書・展示コーナー

平成 27 年 3 月 3 日(火) ～ 3 月 15 日(日) 9:00 ～ 21:30

常設展示

常設の展示として、麻布区民協働スペース ロビーでの展示を行いました。



第 1 期パネル展ポスター



第 2・3 期パネル展ポスター

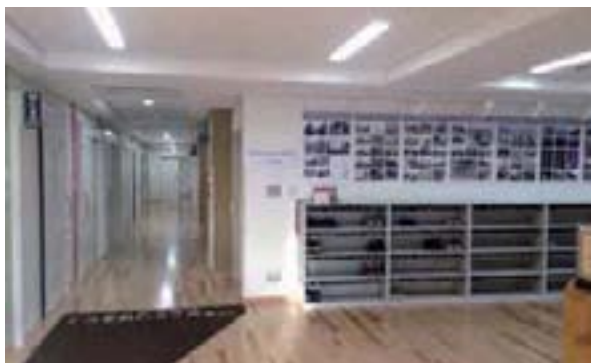
パネル展等の様子



フジフィルム スクエア ミニギャラリー



麻布子ども中高生プラザ等複合施設



麻布区民協働スペース ロビー



まち歩きの様子

Ⅳ．携わった方々の声

◇「麻布未来写真館」座長：近藤 敏康

麻布未来写真館は、平成 27 年に創立 6 周年を迎えました。平成 21 年の創立以来、区民協働事業として、麻布の今を麻布にゆかりのあるメンバーならではの視点で写真とキャプションにより記録しつつ、同時に麻布にまつわる古い写真を集めて参りました。毎年、年度末にはフジフィルムスクエア、東洋英和女学院史料展示コーナー、港区麻布地区総合支所ロビー、港区役所ロビーをはじめ公共施設でパネル展を開催すると共に、解説付き写真集にもなる報告書をまとめて参りました。

平成 24 年度からは、有栖川宮記念公園内公園事務所掲示板、麻布地区総合支所二階廊下で、パネルの常設展示を行い、平成 26 年度からは、港区公式ホームページでの写真パネル、報告書の公開がスタート、より多くの方々にご覧頂けるようになりました。

設立からの数年は、麻布未来写真館をご存じの方がほとんどない中、運営されていましたが、民放テレビやケーブルテレビでのご紹介、毎年のパネル展、さらには常設展示、ホームページ、ザ・AZABUをはじめ、港区関連での写真のご利用のおかげで、今では「見た事がありますよ」、「写真パネルを会社ロビーに展示したいので貸して欲しい」、「会合で写真パネルを見せたい」等、お声をかけて頂きました。現在では報告書を東京都立中央図書館にも収蔵して頂けるまでに、徐々にではありますが成長して参りました。

麻布未来写真館がスタートした平成 21 年の 2 年後には、東日本大震災が発生、麻布地区の震災後の様子や、東京タワーの先端のアンテナが曲がった景色を記録に残しました。その後も大規模開発を中心とした街並みの変化が続き、その勢いは現在も 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催に向け、加速している様に見受けられます。

今回 6 周年を記念して、過去の活動で制作した、写真パネル、報告書より、代表的な写真を集めた、解説付き写真資料にもなる、記念誌を発行すると共に、ホームページにて公開する運びとなりました。歴代の座長、副座長をはじめ、ご参加のみなさま、写真提供や、情報提供などにご協力頂きました皆様の並々ならぬ努力の賜物と深く敬意を表しますとともに、歴代の麻布総合支所関係者の皆様、支援事業者の皆様、関係各位の日頃からのご支援に厚く御礼申し上げます。

麻布未来写真館事業も創立 6 周年という節目を迎えた事を一つの契機と捉え、これまで諸先輩が築きあげてこられました実績を礎（いしずえ）に、次の発展の為、今まで以上に港区麻布地区の活性化、安全安心なまちづくりなど、写真パネルを通じて記録、広報を通じご協力すると共に、地元に着目を持つきっかけ作り、将来の麻布人の方々へ、現在の麻布人からのメッセージも込めたパネル作りなどにも留意した活動を、未長く続けて参りたく考えております。

これからも麻布未来写真館事業へのご支援、ご指導、ご協力、古い写真や、古い麻布の音の録音テープのご提供など、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

◇ メンバーからの声

私は麻布で生まれて長く麻布暮らしですが、学生時代は六本木のスクエアビルのディスコに通ったり、仙台坂下でバギーパンツを買ったりしました。私は60歳が近いですが、これからの自分の情熱は何かと思うと故郷、麻布です。若い人も都心の色々な地域に関心が強まっています。色々な街並みがあり、とても樹木が多く鳥の声が元気で、可愛い猫がいる麻布が好きです。
(小山 浩)

歴史と伝統ある学舎や庭園、老舗などが点在し、落ち着いた雰囲気を感じさせる昼の街並み。ネオンの輝きとともに雑踏する大通り。どちらの麻布も愛しています。

姿を消していった店や建物は数え切れませんが、近代的なビルの狭間で、20年、30年と人びとに親しまれ、愛されている店や場所も健在で、たのもしく感じることも少なくありません。

いつも新鮮な驚きと感動を与えてくれる麻布未来写真館の活動に心から感謝しています。
(椿 由美子)

この事業に参加するまで、私にとって麻布といえば、美術館・ギャラリー巡り、前職での大使館訪問がメインで「点的」繋がりでしかありませんでした。それがひょんな縁からこの麻布未来写真館に参加することになりました。麻布在住の大先輩方に色々教わり、町歩きをしていく中で、「面的」かつ「歴史的」広がりを持って町を見ることとなり、本当に貴重な機会となりました。このような豊かな事業がさらに発展することを願っています。(櫻井 綾)

◇ 事務局からの声

本活動報告は、港区麻布地区総合支所の地域事業「麻布未来写真館」において、区民参画組織「麻布を語る会『麻布未来写真館』分科会」が、平成21年度から平成26年度までの6年間に取り組んできた活動の記録をまとめたものです。

麻布未来写真館はファインダーをとおして、未来に向けた新しい麻布を発信してきました。

写真には写された記録だけではなく、多くの人々にとっての体験の「記憶」をも含められた、かけがえのない価値が備わっています。

本活動報告に掲載された写真は、新しいものも古いものも全て、ファインダーをとおして「麻布」をめぐる様々な人々の記憶を未来につなぐ貴重な記録です。

これからも、「麻布」の未来に向け、麻布地区総合支所は、多くの方々に記録と記憶の価値を伝え、区民の皆様の地域への共感や愛着をより一層高めてもらえるよう取り組んでまいります。

活動を進めるにあたり、様々なかたちでご尽力をいただきました区民の皆さんや関係者の方々に、心から御礼を申し上げます。

V . 参考資料

< 主な参考文献・資料等 >

「増補 写された港区 三(麻布地区編) ～麻布・六本木～ほか」 港区教育委員会
港区産業観光ネットワーク MINATO あらかると(<http://www.minato-ala.nrt/>) など

< 古い写真についての提供および資料等 >

河村 かずふさ氏、桜井昭一氏、豊田 幸雄氏、田口 重久氏、齋藤 富士郎氏、佐藤 元紀氏、渡邊 稔子氏、長谷川 幸雄氏、今清水 正巳氏、木村 雅彦氏、相田 清隆氏、黒鉄 ヒロシ氏、桜井 慧雄氏、早川 一夫氏、東京大学生産技術研究所、東京アメリカンクラブ、東京大学物性研究所、六本木商店街振興組合、森ビル株式会社、麻布西野園、東洋英和女学院、港区立麻布小学校、港区立筈小学校、港区立南山小学校、法政大学史委員会、駒澤大学禅文化歴史博物館、国立天文台天文情報センター、港区立港郷土資料館、国立天文台 (NAOJ)、JAXA/ISAS、国土交通省国土地理院、
『江戸名所図会』港区立港郷土資料館所蔵、港区立港郷土資料館(『平成 18 年度特別展 UKIYO-E 一名所と版元一』、『東京案内』、『区政要覧』等)、
『港区議会史 通史編』港区議会、『増補 写された港区 三(麻布地区編) ～麻布・六本木～ほか』、『麻布区史』、『東京写真帖』、『アルバム東京文学散歩』、『昭和御大礼奉祝志』、『みなと写真散歩』、『東京案内』、『麻布鳥居坂警察署誌』 (順不同)

< 技術・会場協力等 >

達川 清氏 (フォトグラファー)、その江 氏 (フォトグラファー)、フジフイルム スクエア (富士フイルム株式会社)、学校法人東洋英和女学院、ありすの杜 南麻布、森ビル株式会社、麻布子ども中高生プラザ等複合施設 (順不同)



パネル展の様子



分科会の様子

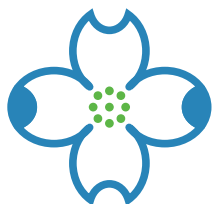


まちあるきの様子



分科会の様子

区 の 木



ハナミズキ

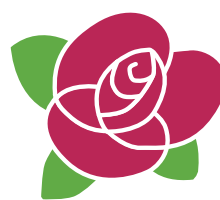
ミズキ科
北米原産 外来種
落葉広葉樹

区 の 花



アジサイ

ユキノシタ科
日本（関東南部）原産
落葉広葉樹（1.5～2.0 m）



バラ

バラ科
日本、中国、欧州原産
常緑落葉低木つる



港区のマークは、昭和 24 年 7 月 30 日に制定しました。旧芝・麻布・赤坂の 3 区を一丸とし、その象徴として港区の頭文字である「み」を力強く、図案化したものです。

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会 活動の記録（平成 21 年度～平成 26 年度）

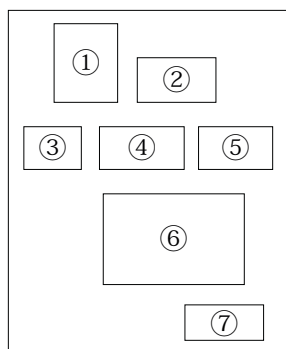
刊行物発行番号
26301-1435

平成 27 年(2015 年) 3 月 発行

発行 港区 麻布地区総合支所 協働推進課

〒 106-8515 東京都港区六本木 5 丁目 16 番 45 号

電話 03-5114-8812



《表紙の写真》

- ① 昭和 30 年代：筈小学校旧校舎入り口 ◇写真提供：港区立筈小学校
- ② 昭和 40 年頃(1965 年頃)：飯倉片町付近 ◇写真提供：渡邉稔子氏
- ③ 昭和 42 年(1967 年)：飯倉交差点付近 ◇写真提供：河村かずふさ氏
- ④ 明治から大正時代：麻布教会(鳥居坂教会の前身) ◇写真提供：東洋英和女学院
- ⑤ 昭和 11 年(1936 年)：雪の降る道 ◇写真提供：東洋英和女学院
- ⑥ 昭和 32 年頃(1957 年頃)：ツイソーの橋 建築前航空写真
◇写真提供：早川一夫氏 写真撮影：佐藤翠陽氏
- ⑦ 大正 3 年(1914 年)：開園時の園舎 ◇写真提供：東洋英和女学院

ファインダーをとおして、未来に向けた新しい麻布を発信していきます。

「麻布未来写真館」

港区麻布地区総合支所では、区民や企業等と協働し、
麻布地区の昔の写真などを収集するとともに、定点写真を撮影し、
麻布のまちの変化を保存する取組として
「麻布未来写真館」事業を実施しています。

麻布を語る会「麻布未来写真館」分科会
活動の記録（平成21年度～平成26年度）

これまで作成したパネルや活動報告は、Webでもご覧になれます。

港区公式ホームページ

<http://www.city.minato.tokyo.jp/>

麻布未来写真館

検索 🔍



「麻布未来写真館」はこちら

「麻布未来写真館」では、古い写真を探しています！

未来に向けて、残し、伝えていくべきとお感じになる「麻布地区の古写真」がありましたら、どのようなものでもかまいませんので、港区麻布地区総合支所までお寄せください。

詳細につきましては、協働推進課地区政策担当までお問合せください。

お問合せ

TEL：03-5114-8812